

Ⅲ－３．我が国の伝統的育児に関する妥当性の検討「３歳児神話」の検討

研究協力者 庄司 順一¹⁾ ・加藤 忠明¹⁾ ・川井 尚¹⁾
谷口和加子¹⁾ ・山岡 テイ²⁾ ・帆足 暁子³⁾
田川 悦子⁴⁾ ・石原 栄子⁵⁾

はじめに

子どもの養育には3歳までの育て方が決定的に重要である、あるいは3歳では遅いなどといわれることがあり、「3歳児神話」ということばも使われる。こうしたことが、子育てへの負担感や焦りをもたらしてもいる。しかし、「3歳児神話」としていわれるようなことが、どのような根拠によるのか、またはたしてこれを裏付ける知見があるのかは、明らかではない。そこで、本研究では、発達心理学、臨床心理学、小児医学、家族社会学、保育学、育児学の専門家による討議と文献研究により、1)「3歳児神話」ということばの意味、2)「3歳児神話」の基礎となり得る理論的根拠、3)「3歳児神話」の認知度、4)「3歳児神話」ということば、あるいはその意味するところが育児書、育児雑誌においてどのように扱われているかの実態、5)外国の育児書における乳幼児期の取り扱い、6)「3歳児神話」を裏付ける知見、の検討を行った。

1 「3歳児神話」ということばの意味

(1)「3歳児神話」ということばの使用とその意味

「3歳児神話」とはどういうことをいうのか、まずこのことを検討する。

「3歳児神話」のもっとも基本的な意味とし

¹⁾ 日本子ども家庭総合研究所 ²⁾ 情報教育研究所

³⁾ 淑徳短期大学 ⁴⁾ 横浜高等教育専門学校

⁵⁾ 作新学院女子短期大学

ては、「3歳頃までに、子どものこれからの能力、発達が決まるから心して育てよ」という、3歳までの子育ての重要性を説くものと考えられる。ただ実際には、「3歳児神話」ということばが使われることはあまり多くない。育児書など母親向けに書かれた著書の中では、しばしば、「三つ子の魂百まで」ということわざをひいて、「3歳頃までの発達の重要性、あるいはこの時期までの子育ての重要性」が指摘されている。いくつかを例示しよう。

『子供の将来が、三歳までに決まってしまう』—大脳生理学の急激な発達は、乳・幼児期、特に、三歳までに、脳に与えられた刺激が、人間の一生の基礎を築くことを明らかにしました。昔から『三つ子の魂百まで』といわれてきましたが、実際、三歳までの間に、子供の脳に刻まれたものが、性格をはじめ、知能や情操の発育に、多大な影響を及ぼしているのです。いふならば、三歳までが、人間形成のうえで最も重要な時期、この間の子供への教育は、極めて意義のあるものと考えられます。まさに三歳までが勝負といっても過言ではありません(聖教新聞社, 1971)。

「俗に“三つ子の魂百まで”と言われてきましたが、まさにその通りで、乳幼児期における精神の糧如何によって、その人の一生の性格が左右されるものです(古屋, 1982)。「我が国には、先人たちの長い体験の中から生まれた

『三つ子の魂百まで』ということわざがあり、ちゃんとした子育てをするには、乳幼児期を特に重視すべきことが常識となっておりました」（井深ほか, 1984）。

「『三つ子の魂百までも』と古諺にあるように、形成された性格はなかなか変わらないことは、古来経験的に知られていることです」（作田, 1984）。

「母原病」の提唱者である久徳(1984)は、人間形成医学の発達によって、従来考えられていた以上に様々な人間としての基礎、例えば体質性の病気や知能の基礎、登校拒否や家庭内暴力など心身の成長発達の歪みによるいろいろな異常や歪みは三歳までにできてしまうことがわかってきた、と述べている。

ここに引用した諸著書は、「三つ子の魂百まで」ということわざをひいて「3歳頃までの発達の重要性」について説明しているが、「3歳児神話」ということばは使われていない。

ところで、この「三つ子の魂百まで」ということわざの本来の意味は、広辞苑(新村, 1991)によれば、「幼いときの性質は老年まで変わらぬことのたとえ」であり、この「幼いときの性質」には、「もともと持って生まれた」という意味と、「幼い頃に形成された」という意味とがあるという。同様に、「故事俗信ことわざ大辞典」(尚学図書, 1985)でも、「幼少時代の性格は一生かわらないということ」であるという。つまり、幼児のときの性質は一生変わらないという意味であり、必ずしも子育ての重要性だけを説くものではない。しかし、乳幼児期の重要性を親に知らしめていくための格好の材料として用いられ、ここから「3歳児神話」が形

づくられていったと考えられる。

他方、「3歳児神話」が「三歳までの子育ては母の手で」という意味で使われることも多い。例えば、平井(1982)は次のように述べている。

「もしこの時期に、母親との間に情緒的な関係が成立しなかった子どもは、まもなく攻撃的行動を現したり、無気力になったりします。

(中略)それが思春期になって爆発し、家出や非行ばかりでなく、精神病と疑いたくなるような行動に出ることもあり、近頃そのような子どもが増加しています。母親は子どもにとってキーパーソンであるだけに、とくにそれが三歳未満である場合には、子どもの人格形成に及ぼす影響は大きいのです。」

「3歳児神話」ということばが普及したのは比較的最近であり、とくに上述のような、「母親による育児」を強調した、いわゆる「母性神話」と同様の意味で用いられる場合に、「3歳児神話」という明確な表現がでてくることが多い。

例えば、「『3歳児神話』というのは、生まれてから三歳までの間に、母親との強い絆で結ばれた子どもほど、心も身体も健全に育ち、そうでない子どもは情緒不安定になり、心身の発達がアンバランスになるというものである」（たけなか, 1994）。

「『三歳まで、あるいは就学前は母親が育児に専念すべきだ』とする母性観」（大日向, 1990）。

「『三歳までは母の手で』…三歳神話=母性神話」（落合, 1994）。

「『三歳までは母の手で』『母性愛こそ崇高』『乳幼児期の母子関係が人格の基礎』…と賞賛と脅しがないまぜにされた『母性神話』・『三歳神話』」(小沢, 1995)。

週刊誌AERAでも、「3歳までは、お母さんの手で子供を育てるべきだという『3歳育児神話』」と記述され、このような見方が普及していることを示している(茂利, 1997)。これらはすべて、「3歳児神話」を「母性神話」と同様の意味でとらえ、「当然母親が子育てをすべき」という「神話」に疑問を投げかけているものである。

「母性神話」ということばの意味を明確に述べることもむずかしいが、「母親には、本来、子どもへの愛情と子育てへの適性がそなわっており、子育ては母親がその愛情と適性でもってするものである」というような意味といえよう。

以上、「3歳児神話」の意味するところを概観してきたが、これを整理すると大きく2つに集約されよう。

第1は、子どもの3歳頃までの重要性を説くものであり、第2は、母親による育児の重要性を説くものである。後者は前者から派生してきたものと考えられるが、現在は、しばしばこの第2の意味合いで用いられ、これに対して「神話である」という疑問が、たけなか、大日向、落合、小沢らから投げかけられている。

(2) 「3歳児神話」の背景

「3歳児神話」、とくに「母性神話」に近い意味での「3歳児神話」の意識はどのような背景の中で形成されていったのだろうか。

第1に、1960年代頃からの医学・心理学の分野において乳幼児期の可能性についての研究

や母子関係についての研究が急激に進んだことを指摘することができよう。そして、この知見を育児に応用しようとした。

第2に、近年の社会環境の変化にともない、不登校をはじめとする思春期の子どもの問題が顕在化し、その要因の一つとして乳幼児期の育児状況に関心がもたれたことがある。第3に、女性の社会進出にともなう保育、とくに乳児保育の普及があろう。これと直結するものではないが、親の育児知識、技術が不十分であることが目立ってきたことも、育児に関連した領域の専門家の懸念を招いたといえよう。

第4に、社会・経済政策によるという考えもある。大日向(1996)によると、母性神話は「当時導入された資本主義体制の維持強化とそのため必要とされた性別役割分業を支える理念であったと考えられるが、こうした母性観は、その後もさまざまな政治的経済的な要請に強化されて今日に至っている」という。

小沢(1995)は「3歳児神話」について、1960年代の高度成長期に良質な労働力を確保するために、家庭管理と育児を女性の仕事として強調する政策がしかれたとし、とくにその時期は3歳児健診が強化され、乳幼児と母性の管理政策という政治的操作をはかったという。

青少年育成国民会議は、1984年に、乳幼児期の子どもへの対応の重要性について広く一般に普及をはかるために「三つ子の魂百まで これからの家庭教育」という小冊子を出版した。この中には、いくつかの自治体による子育て中の母親を対象とした活動が紹介されており、3歳頃までの重要性を一般に広めようとする活動が奨励されていたことがうかがえる。

これらが、小沢のいう政治的操作といえるか

どうかはともかくとして、公的な場で3歳までの発達の重要性が強調され、育児をする人に何らかの影響を与えていたことが推測される。

(3)小括

「3歳児神話」が意味するところは、全面的に否定されるべきものではない。「3歳児神話」が「乳幼児期の重要性」ではなく、「3歳までに決まってしまう」とか、「母親による子育て」を強調するところが、批判の対象となっている部分であり、「神話」の部分なのである。

「3歳児神話」によって、3歳までの発達が重要であるというだけではなく、親子関係、とくに母子関係の重要性が強調されたため、母親を子育てにしぼりつけ、閉塞状況に追い込むものになるとともに、父親を家庭・子育てから排除する要因ともなり、さらに、早期教育への関心を過剰に高めたといえよう。

文 献

古屋行雄：集団保育から家庭保育へ—ソビエトにおける転換—。作田 勉・松尾宣武編：新しい育児。星和書店，1982

平井信義：母子・父子関係と子どもの人格発達。作田 勉・松尾宣武編：新しい育児。星和書店，1982

井深 大ほか：三つ子の魂百まで これからの家庭教育。社団法人青少年育成国民会議，1984
久徳重盛：現代子育て格言集。病める現代と育児崩壊。中央法規出版，1984

茂利勝彦：仕事と子供の狭間で30代母が悩む三歳育児神話。AERA，1997年11月17日号，p.6-8

新村 出編：広辞苑（第4版）。岩波書店，1

991

落合恵美子：親はだめになったか。21世紀家族へ。有斐閣，1994

大日向雅美：日本社会の変遷と母性。こころの科学，1990

大日向雅美：日本的な母子関係と夫婦関係。大日向雅美ほか編：現代のエスプリ(342)子育て不安・子育て支援。至文堂，1996

小沢牧子：乳幼児政策と母子関係心理学—つくれる母性意識の点検を軸に—。井上輝子・

上野千鶴子・江原由美子編：日本のフェミニズム第5巻母性。岩波書店，1995

聖教新聞社：三歳までが勝負。聖教新書，1971

作田 勉：正しい育児の基本。作田 勉・松尾宣武編：新しい育児。星和書店，1982

尚学図書編：故事俗信ことわざ大辞典。小学館，1985

たけながかずこ：3歳児神話なんて気にしない。メディアファクトリー，1994

2 「3歳児神話」の理論的根拠

「3歳児神話」が話題になるには、それなりの根拠があると考えられるが、ここでは、1)「三つ子の魂百まで」ということわざが示すような文化的背景、2)脳の重量は乳幼児期に成人の80%にまで達するという神経生理学的知見、3)幼児体験がのちの人格形成や神経症発症に関係するという精神分析理論、4)刷り込み(刻印づけ、インプリンティング)や臨界期といった発達初期の現象を明らかにした比較行動学、および5)新生児の有能さを明らかにした新生児研究の知見について、紹介、検討を行った。

(1)「3歳児神話」の文化的背景

わが国では「三つ子の魂百まで」ということわざが児童心理学の教科書や育児書にしばしば登場する。一般の人もよく知っていることわざといえる。類似のことわざには「三歳の習い八十に至る」などがある。このことわざを引いて、3歳までの重要性を指摘することは多い。

このことわざの由来について今回の研究では明らかにできなかったが、江戸時代には使われおり、式亭三馬などの作品に記されている。

「三つ子」とは、3歳ではなく、数えの3歳、つまり満2歳までをさす、あるいは年齢は厳密なものではなく、乳幼児をさすというようにも考えられる。

英語では、*“What is learned in the cradle is carried to the grave”*や*“As the boy, so the man”*がこれらの格言にほぼ相当するようである。しかし、わが国における「三つ子の魂百まで」ほど頻繁には使われないようである。また、これらの英語の格言には「年齢」が示されていないことも興味深い。

(2) 神経生理学的知見

近年の神経生理学の進歩によって、人間の行動のすべてが解明できたわけではない。しかし、その知見には、従来からいわれてきた「3歳児神話」、またさらにそれ以前の乳幼児や胎児のすばらしい能力の可能性や、環境の大切さを裏付けると考えられることが多く見つかっている。人間の脳や神経系の発育・発達は、部位によってその成熟度は異なるものの、その原型は乳幼児期にほぼ完成すると考えてよい。

① 脳の重量

成人の脳の重量は平均すると男性では1390g、女性では1250gである。出生時の脳の重量は約350~400gで、成人の約25~30%であるが、出

生後急速に増加して、3歳で成人の約80%、6歳で約90~95%に達する。重量の点からみれば、3~6歳でほぼ完成するといえる。しかし、重量のみが脳の成熟度を示すわけではない。

② 神経細胞とニューロンの形成

成人の脳にある約140億個の神経細胞（脳細胞）は、母体が妊娠7週から、18~20週までの間にほぼ全部作られ、出生後は増えない（養老ほか、1994）。神経細胞の数から考えれば、胎児期の半ばには脳の原型はほぼ完成しているといえる。しかし、一つの神経細胞の役割は情報の受け渡しのみであり、以下に述べる髄鞘化や神経細胞間の連絡網の形成により始めて脳は全体として機能するようになる。

脳の機能をつかさどる基本単位は、現在、ニューロン（一つの神経細胞とその突起をいっしょにしたもの）と考えられている。一つの神経細胞（ニューロン）には、髄鞘で覆われた長い軸索突起（いわゆる神経繊維）があり、他のニューロンに情報を伝えている。そして、さらに無数の樹状突起をもち、その突起のシナプス（ニューロンとニューロンの接合部）は他のニューロンから情報を受けている。一つのニューロンには数十から数万ものシナプスがある。

③ ニューロンの成熟

出生後の脳の重量増加は、ニューロンの周囲にあるグリア細胞（ニューロンに栄養を補給したり、保護したり、髄鞘をつくる）の増加のほか、シナプスの数が増えたり、ニューロンの突起が複雑に伸びたりするためである（養老、1994）。このようなニューロンの成熟が脳の成熟であり、3歳頃にほぼ完成する。

このような神経生理学の知見は「3歳児神話」の根拠となりうるといえよう。

(3) 精神分析理論

男の子が母親を愛の対象とし、父親を邪魔に思うという「エディプス・コンプレックス」という概念からも明らかなように、フロイト(Freud, S.)は、子どもの人格形成が親子関係の中でなされることを最初に強調した研究者といえる。そして、フロイトは、神経症の原因として乳幼児期の体験を重視した(Freud, 1916)。

このような考え方は発達心理学に大きな影響を与え、また精神分析学の流れをくむスピッツ、ボウルビィなどの研究者がホスピタリズムや初期経験の影響についての実証的研究を行い、また母子関係の理論をつくっていった。

そういう意味で、精神分析理論も今日の「3歳児神話」と密接な関連があるといえよう。

(4) 比較行動学

比較行動学は、ハインロート、ローレンツ、フォン・フリッシュ、ティンバーゲンらが創始した動物行動に関する学問であるが、ここではとくに刷り込み(imprinting)と臨界期(critical period)の概念が関係する。

ローレンツ(Lorenz, 1935)は、親や同種の仲間の認識という、いわば本能行動と考えられたものが、必ずしも生得的なものではなく、また条件づけのような学習によるものでもないことを明らかにした。つまり、刷り込みとは、ある種の鳥類にみられる現象で、孵化後の特定の時期に出会ったものを親として(そして仲間として)認識することをいう。この現象の特徴は、発達初期のごく短時間に決定されること、刷り込みがいったん成立すると変化しないこと(不可逆的であること)にある。ローレンツは鳥類の中でも特定の種に認められる現象であることを指摘しているが、その後哺乳類の一部にもみ

られることが明らかになった。

身体構造面については、ある特定の時期に特定の組織、器官が発生することはよく知られている。例えば、胚の発生において、ある時期までは細胞や組織の移植を行うと、本来の組織ではなく、移植された場所に適合した組織が形成されてくるのに対して、その時期をすぎると、新たに移植された部位に本来の組織が形成されてしまう。また、先天性風疹症候群の発症頻度も罹患した妊娠の時期によって異なることなどがある。

発達心理学においても、発達のある時期における初期経験の影響が、比較行動学の刷り込みや臨界期の概念を用いて検討されたわけである。

こうしたことが、「3歳までに」というような「3歳児神話」の裏付けとされたといえよう。

(5) 新生児研究

新生児はかつては無力、無能な存在とみられていた。しかし、1960年代から盛んになった研究は、新生児が従来考えられてきたよりもはるかにすぐれた能力を有していることを明らかにし(庄司, 1983)、「有能な新生児」あるいは「有能な乳児」(Stone, Smith, and Murphy, 1973; Bower, 1974)などといわれるようになった。すなわち、誕生の瞬間から、視覚、聴覚などすべての感覚は機能している(Lipsitt, 1977)。

もちろん、新生児には大きな限界もあるのであるが、インプットできる体制にあるわけであり、そうすると刺激を与えることが重要になるとも考えられる。「3歳」ではなく、「生まれたときから」の働きかけが重要であるとも考えられる。

こうした知見も、直接ではないにせよ、発達初期への一般の人たちの関心を高めたといえよ

う。

(6)小括

ここで検討した理論、概念、研究知見は、人間発達の初期、つまり乳幼児期の重要性を指摘している。これらの研究が、「3歳児神話」といわれることの根拠として利用される。しかし、乳幼児期の重要性という一般的な指摘をこえて、発達の決定論や母親による養育の不可欠性を論じるためには実証的な知見の検討が必要である。本稿の「6 「3歳児神話」を肯定する、あるいは否定する知見」でこの課題に取り組むが、その前に、「3歳児神話」の認知度や、親にとって主要な情報源である育児書、育児雑誌におけるこの問題の取り扱いをみておこう。

文 献

Bower, T. G. R. : Competent newborn. *New Scientist*, 61: 672-675, 1974

Freud, S. (1916) (丸井清泰訳：精神分析入門下。フロイド選集第2巻。日本教文社, p. 116-199, 1953)

Lipsitt, L. P. : The study of sensory and learning processes of the newborn. *Clinics in Perinatology*, 4: 163-186, 1977

Lorenz, K. (1935) (丘 直通・日高敏隆訳：鳥の環境世界における仲間。「動物行動学Ⅰ」上 みすず書房, p. 153-365, 1977)

庄司順一：正常児の行動。小児医学, 16(1): 1-20, 1983

Stone, L. J., Smith, H. T., and Murphy, L. B. : The competent infant. N. Y. : Basic Books, 1973

3 「3歳児神話」に関する認知度—予備的調査—

(1)調査の目的と方法

「3歳児神話」を検討するにあたり、その一環として、幅広い年齢層の女性達から「3歳児神話」に対する認知度や意見を聞き、参考資料とすることを目的に調査を行った。

調査時期と地域は、1998年3月12日(埼玉県浦和市)、3月16日(愛知県名古屋市)。対象は、乳幼児や小学生をもつ母親と、子育てサロンに関心のある主に育児経験をもつ女性と保健婦・助産婦。年齢層は20~60代と広いが、中心は30代が52.0%、40代が35.0%であり、第1子の年齢の中心は小・中学生で、保健婦や助産婦の中には子どもがいない女性も10名いた。調査方法は、質問用紙を直接手渡し回収した。集計数は100通であった。回答者の就労状況は、専業主婦が49.0%、パートタイマー30.0%、常勤者21.0%であったが、保育の現場に携わる者やこれから外で働きたいという意識が高い専業主婦が含まれていることが特徴的であった。

(2)調査結果

「『3歳児神話』という言葉を知っていますか?」の設問には、73.0%が「知っている」と回答していた。年齢別の認知度では、30代が最も高く76.9%、次に40代が74.3%であった。母子保健関係者を含めても7割の認知度であった(図1)。

「『3歳児神話』は、どのような内容だと思えますか」という設問(複数回答)では、「3歳までの子どもへの働きかけが、その後の子どもの成長・発達に大きな影響を及ぼす」と回答

した人が82.0%でもっとも多く、「3歳までは、とくに母親が子どもの育児を行うことが大事だ」が53.0%、「この時期に子どもの情操や五感を育てると効果的である」39.0%と続いていた。これらの回答の中で、「とくにそう思う内容」として、「3歳までの働きかけがその後の子どもへの影響〜」29.0%と、「3歳までは、とくに母親が育児を〜」10.0%が同じく上位を占めていた。回答者の中心年齢層である30代と40代を比較すると、乳幼児をもつ30代の母親達が、「この時期に子どもの情操や五感を育てると効果的である」48.0%と回答しており、40代の29.4%に比べて2倍近く多かった(図2)。

つぎに、「『3歳児神話』という言葉は、どこから聞きましたか」という設問に対しては、「世間一般」49.0%、「育児雑誌」27.0%、「テレビや新聞」26.0%、「育児書」14.0%、「専門書」10.0%、「その他」10.0%、「友人・知人」8.0%、「実家の母」4.0%の順であった。「その他」のうち、半数が「今回のアンケート調査ではじめて知った」と記入していた(図3)。以上の結果は、「3歳児神話」ということばをきいたのは、育児雑誌やテレビ新聞などのマスメディアが比較的多くあげられているものの、

「世間一般」からがもっとも多く、社会的な知識としてこのことばを認知していることが示された。

「3歳児神話」に関連して、2つの相対する意見から、回答者の考えに近い方を選んでもらう設問では、「子どもが3歳くらいまでは母親が育てた方がいい」は35.0%、「必ずしも母親でなくても、愛情をもって育てればいい」は65.0%であった。これを就労状況別にみると、専

業主婦は「3歳くらいまでは母親が〜」は44.9%であったが、常勤者は28.6%と、16.3ポイントの格差があった。今回の調査対象の半数である専業主婦の中でも、その4割が行政による子育てサロンのコーディネーターになるための研修セミナーに集まった人達であったため、社会的な活動に従事する女性が7割を占めたことと、ポスト育児期の40代後半以降の年齢層も含まれていたことから、このような結果が出たと思われる。

それでは、もっと子どもの年齢が低い場合ではどうであろうか。昨年度に実施した3歳から8歳までの園児と小学校低学年の子どもをもつ母親達の子育て観調査では、「子どもが3歳くらいまでは母親が育てたほうがいい」は74.3%で、「必ずしも母親でなくても、愛情をもって育てればいい」は25.7%と、今回の調査とはまったく反対の結果になっていた(山岡, 1998)。昨年度の調査で対象となった4613人の母親達の就労状況は、専業主婦60.0%、パートタイマー27.3%、常勤者12.7%であった。母親の就労状況とクロス集計した結果では、「3歳くらいまでは母親が育てたほうがいい」は専業主婦が81.3%、パートタイマーは71.9%、常勤者は46.5%となっていた。

これら2つの調査結果からは、「子どもは3歳くらいまでは母親が育てたほうがいい」という考え方は、母親の就労状況によって差異がみられ、仕事で働いたり、外で社会的な活動をしている母親や女性は、「必ずしも母親でなくても、愛情をもって育てればいい」という考えを支持する数値が高くなっていた。

文 献

山岡ティ：子育て基本調査報告書. ベネッセ・コーポレーション, 1998

図1 3歳児神話という言葉の認知度

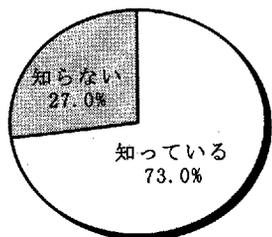


図2 3歳児神話はどのような内容だと思うか

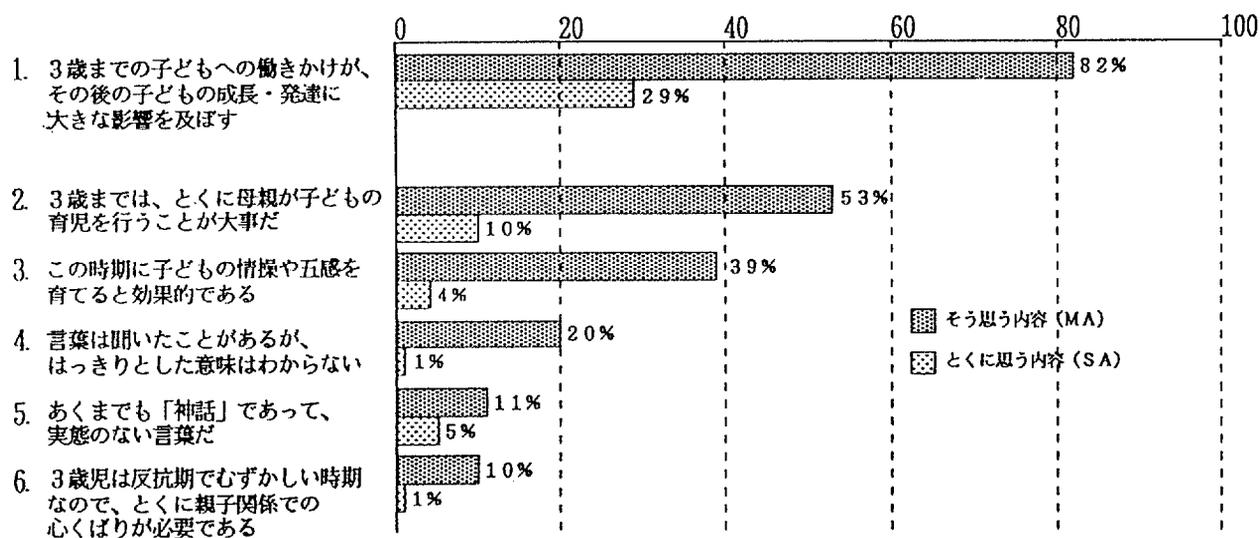
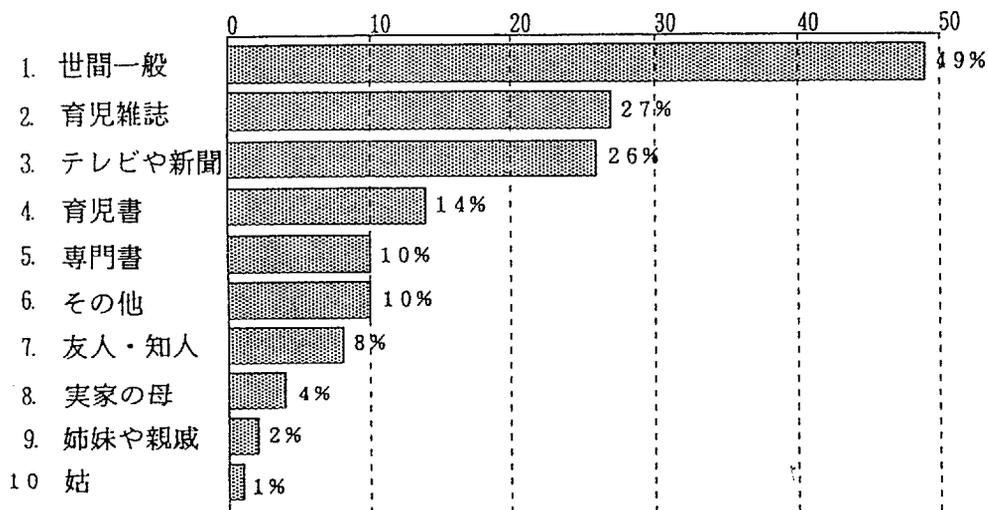


図3 「3歳児神話」という言葉の情報入手先



4 わが国における3歳児神話の受容

(1) 育児書の分析

わが国において子育てに携わる一般の人たちの間で、「3歳児神話」がどのような形で受け入れられてきたのかについて知るために育児書の分析を行った。取りあげた育児書は、表1に示した、昭和20年から平成6年までの約50年間に発行された60冊である。これは、加藤(1993)の調査で明らかにされているわが国の戦後の育児書の発行数の約6%にあたる。年代別には昭和20年代6冊、30年代15冊、40年代15冊、50年代9冊、60年代以降15冊となっている。

全体に、育児書には、子どもの月齢・年齢別に発育・発達の特徴と育て方のポイントが記されていて、3歳までの重要性のみを強調する記述はみられなかった。裏を返せば、育児書を必要とする親たちにとってはどの時期も大切であり、真剣であるということなのであろう。

そこで、「3歳児神話」「三つ子の魂百まで」ということばにしぼって、これらがどのように引用されているかについて調査した。その結果、「3歳児神話」ということばほどの育児書にもみられなかった。他方、「三つ子の魂百まで」は全体で17冊(28%)に記述があった。これを年代別にみると、昭和20年代2冊(3%)、30年代1冊(7%)、40年代5冊(33%)、50年代3冊(33%)、60年代以降6冊(40%)となっていて、記述の割合は昭和30年代に低く、60年代以降に高くなっていることが知られた。30年代から40年代前半にかけての記述の少なさが注目されるが、ちなみに前述の加藤の調査には、この時期は出産場所の変化や人工栄養法

の進歩普及など、わが国の子育て文化が大きく変容した時期であると述べられている。

調査した育児書で「三つ子の魂百までも」が最初に記述されていたのは、昭和23年の「病気をさせぬ新育児法」(表1の文献No.57、以下同様)で、「幼児の躰(教育)は最も大切であって昔から『三つ子の魂百まで』とかまた『生まれより育ち』とかいわれている如く。人格の基礎を作る時であるから、子供の取り扱いに注意しなければならない」と、躰に関して用いられていた。29年の「赤ちゃんの育て方」(No.55)では「『三つ子の魂百までも』という言葉は御存じでしょう。いけないことをするようにならないよう、早く正しい保護を与えたいからなのです。大きな誤りを犯した青年の幼児期を研究している方の話でもその源は幼児期の生活に始まっていることが多いということです。外国の研究でも三歳ごろまでに親から離されて、人から温かい扱いを受けずに育った子供たちが、冷たい心の持主になるといわれています」と、3歳までの有害な環境がのちの発達に問題を残すことがあると記されていた。

昭和30年代に記述がみられたのは1冊のみであった。31年の「完全な育児365日」(No.53)では、「(前略)ところがBのお母さんは育児の勉強をたくさんした方であり、今でも婦人雑誌の育児欄を熟読することを欠かしません。新しい育児書はかならず買うように努めているお母さんなのです。そして『三つ子の魂百までも』—今から規律立った生活をさせなければいけないと気負い立ち、実に正しく授乳時間を守っているというわけです」と、親の無理押しをいましめる項に用いられていた。

昭和42年の「幼児の心とからだ」(No. 36)では「3歳までごろが、将来の性格作りのわかれめで、よい躰を身につける最も大切な時期になります。このことが古くから『三つ子の魂百まで』といわれるものなのです」と記されていた。43年の「幼児のしつけ」(No. 32)では「『三つ子の魂百まで』というように、幼児期につくられた性格は、基本的にあまりかわることがないようです。それだけに幼児期の扱いはたいせつです。しかし、これにあまりこだわるのも考えものでしょう。というのは、幼児期になんとか好みの性格をつくろうとして、両親が不自然な扱い方をする危険があるからです。(中略)子どもの性格を決定するものは、環境以外にもあるということを出し出したいと思えます」と、性格はみずからも伸びるとしていた。43年の「育児としつけ百科」(No. 31)では「『三つ子の魂百まで』とは、わが国の古いことわざですが、幼児期のしつけが将来の性格や人格に大きな影響を及ぼすことを説いたものと思えます。このことは欧米先進国でも一般的に信じられ、今日でもおかあさんがたはおりにふれて、幼児のころのしつけ、それよりも早く赤ちゃんのころからの基本的習慣(食事、睡眠、排泄など)のしつけが、将来にとって重大な影響を持つと教えられています」という記述の後に、家族や友人・隣人など母親以外の対人関係にふれ、「幼児期のしつけや環境だけが、将来の性格づくりに関係しているとは言い切れません」と結ばれていた。46年の「育児書を読む前に」(No. 28)では「昔からとても広く伝えられていることばです。3歳ごろの子ども時代に、その子の性格ができてしまうということでしょう」と記され、人間の基礎が3歳の

ころにできてしまうので3歳児のしつけがきわめて大切であると強調されていた。同年の「ミセスの育児書0-2歳」(No. 27)では性に対する態度の項で、「乳幼児期に経験したことは、大きくなってからの経験とは、比較にならないほど重要な影響を、子どものパーソナリティに与えていきます。いってみれば、その経験が、その子のももの考え方、見方、価値判断といった将来の人格の軌道を敷くことになり、あとは、その軌道の目ざす方向へ向かって走る傾向が強く、途中でその軌道を修正することは、なかなか困難なものなのです。日本でも古来から『三つ子の魂百までも』ということわざがありますが、このことを洞察したものだったと思えます」と記述されていた。

昭和52年の「新しい母と子の育児全書」(No. 24)では、日本人の子育ての項で「役にたつことわざのいろいろ」の一つとして紹介がされ、乳児期の子どもとの接触や、適当な刺激をあたえて適当なしつけをすることの大切さを述べていたが、3歳までの重要性を強調したものはいえなかった。55年の「心とからだ育児の百科」(No. 19)では「胎外胎児期」の説明に続いて「『三つ子の魂百まで』ということばの三つ子というのは、3歳のときということではなく、もっと未熟なこのような特別な発達の変化が起こる時期、つまり、赤ちゃん時代だけが持っているといってもよい発達の可能性に働きかけられた、効果を基盤として3歳ごろまでつづいていく発達を意味するのだと思えます。『三つ子の魂百まで』の、生涯につながるような発達の展開に対して、働きかける育児、それが赤ちゃんを育てることにつながるのだと思えます」と、これまでの記述とは異なる視点で説明がされて

いた。59年の「新育児百科」(No. 16)でも「新しい母と子の育児全書」と同じように、「ことわざに生きる育児の知恵」として、「生みの親より育ての親」「氏より育ち」などと共に紹介され、「しつけや教育は、子どもだけに押しつけても効果が少ないもの。親の趣味、態度、人生への取り組みかたなどを、子どもはじっと見えています」と、養育者の自覚を促す記述がなされていた。

前述したように昭和60年代以降に入ると記述の割合が高くなっていた。60年の「新育児百科」(No. 14)では「『三つ子の魂百まで』といわれますが、人間の基本的な性格や情緒は、主にお母さんの影響を受けて2～3歳ころまでにでき上がります。これは大脳生理学の面からも証明されています。(中略)また発達面でも各機能のバランスのよい発達が目標となりますが、特に3歳までは情緒面の健全な発達が将来の人間形成の基礎になるので最も大切です。そしてこれにはお母さんの影響が大きいことは前述した通りです」と、母親の養育態度の大切さを説くために用いられていた。63年の「0～3歳<最新>安心育児」(No. 13)では「よく『三つ子の魂百までも』が、引き合いに出されますが、それは3歳にして既に「その人らしさ」が表れている、頑固な人はそういえば小さいころも意地っぱりだったな、というような意味だと思います。しつけや教育だけで人間のできが決まってしまうのではないということでしょう」と記されていて、3歳までが大切というより、その時その時の子どもの個性や気持ちを生かしていくことが将来につながるとしていた。同年の「イラスト安心育児のすべて」(No. 12)では、Q&Aの欄で質問者が「『三つ子の魂百

まで』とか、『3歳までのしつけで一生が決まる』といわれますが、まだことばもわからな赤ちゃんにも、しつけというのはあるのでしょうか」と尋ねているのに対して、著者は社会生活の第一歩として3歳までをとらえるように指導していた。同年の「はじめての赤ちゃん」(No. 11)では「『三つ子の魂百まで』という言葉があるように、3～4歳ころの環境や経験が、大人になってからのあらゆる反応や対処の仕方の基礎になっている、ということは確かのようにです。そういう意味では、このころの家庭の内外の環境や親の子への接し方がたいせつなのはいうまでもありません」と記述されていた。平成元年の「はじめての赤ちゃん」(No. 10)では「『三つ子の魂百まで』ということわざがありますが、3、4歳ごろにつくられる性格があとに影響していることを示しているのでしょうか」「脳をつくっている神経細胞の数は、生まれたときのままでふえません。しかし3歳ごろまでに神経細胞は成熟していきます。『三つ子の魂百まで』といわれるように、3歳ごろまでに良い環境、良い刺激を与えて、人間性の基礎をつくるのが大切なのです。これは、知能よりも心のうえで大切なことです。幼いときにはぐくまれた広い心が、その後の人生を生きる力になってゆくのです」と記述されていた。5年の「0～3歳個性を伸ばす能力を育てる」(No. 2)では「よく『三つ子の魂百まで』といいます。あるいは『3歳まではお母さんが育てるように』という説も有力です。こういう考え方が、目下子育て中のお母さんに、なんとなく圧迫感を与えているのではないのでしょうか。3歳までの育児を失敗してしまうと、とり返しがつかないのではと思ってしまうのですね」と3歳まで

表1 わが国の戦後育児書における「3歳児神話」の記述

「三つ子の魂百までも」記述有=○

発行年	No	書名	著者名	発行所	記述
平成6	1	育児なんでも相談	鈴木幸子編	主婦の友社	
5	2	0～3才個性を伸ばす能力を育てる	汐見稔幸	主婦の友社	○
4	3	ひとりひとりのお産と育児の本	毛利子来	平凡社	△
4	4	わたしの赤ちゃん育児の本	主婦の友社編	主婦の友社	
4	5	子育てママへ 保健婦からひとこと	島 美代	日本小児医事出版社	
3	6	妊娠・出産・育児 安心赤ちゃん百科	加藤季子・堀口貞夫ほか	主婦と生活社	
2	7	らくらくお産とすくすく育児	雨森良彦・坂田堯監修	講談社	
2	8	赤ちゃんハンドブック	雨森良彦・高橋悦二郎	丸善メイツ	
1	9	赤ちゃん百科	小林 登・鴨下重彦	主婦の友社	
1	10	はじめての赤ちゃん—安心育児のすべて—	今村榮一	主婦と生活社	○
昭和63	11	はじめての赤ちゃん	馬場一雄監修	主婦の友社	○
63	12	イラスト安心育児のすべて	高橋悦二郎監修	世界文化社	○
63	13	0～3歳<最新>安心育児	池亀卯女	主婦と生活社	○
60	14	新育児百科	二木 武	婦人生活社	○
60	15	五感の育児	川崎憲一	ぎょうせい	
59	16	新育児百科	主婦と生活社編	主婦と生活社	○
58	17	小児科相談室	巷野悟郎	同文書院	
57	18	子ども・健康・食生活	菅原明子	文化出版局	
55	19	心とからだ 育児の百科	主婦の友社編 (岡宏子)	主婦の友社	○
55	20	最新赤ちゃん百科	主婦の友社編	主婦の友社	
54	21	育児としつけの百科	平井信義編著	小学館	
54	22	改訂育児学	平井信義	光生館	
53	23	赤ちゃんからママこうして欲しいの	毎日新聞社編	毎日新聞社	
52	24	新しい母と子の育児全書	平山宗宏	社会保険出版社	○
48	25	赤ちゃんを育てる基礎技術	主婦の友社編	主婦の友社	
47	26	ママさん文庫⑥育児のコツ12章	松村龍雄	主婦の友社	
46	27	ミセスの育児書0～2歳	ミセス編集部編	文化出版局	○
46	28	育児書を読む前に	久徳重盛	黎明書房	○
45	29	まちがいだらけのママ—子どもからの訴え—	高橋種昭・高野 陽	日新報道	
44	30	育児の相談百科	緒方安雄監修	講談社	
43	31	育児としつけ百科	中村兼次	主婦の友社	○
43	32	幼児のしつけ—感情・才能・生活習慣—	女子栄養大学出版部編	女子栄養大学出版部	○
42	33	赤ちゃんの発達	婦人之友編集部	婦人之友社	
42	34	赤ちゃんの心とからだの本	波多野勲子	光文社	
42	35	小児科医がお答えします	主婦と生活社編	主婦と生活社	
42	36	幼児の心とからだ—育児・しつけ・病気—	田村 尚	日本加除出版	○
42	37	暮らしにあわせた育児の知恵	大塚昭二	こども部屋社	
41	38	0～3才<育児のポイント> ママたちはこう育てた	阿部明子	童心社	
41	39	強い子弱い子—育児の医学と教育—	遠城寺宗徳	慶應通信	
39	40	ママの育児ぶり診断	高橋悦二郎・高橋種昭	主婦と生活社	
39	41	こども三面鏡	東 洋・中村 孝・藤永 保	国土社	
37	42	赤ちゃん百科	主婦の友社編	主婦の友社	
36	43	新しい育児教室	恩賜財団母子愛育会編	恩賜財団母子愛育会	
35	44	たのしい育児としつけ	平井信義	大日本出版	
35	45	はじめての赤ちゃん	緒方安雄	実業之日本社	
35	46	育児のプラン	宇川和子	柴田書店	
34	47	幼児の健康と保育	平井信義	博文社	
33	48	赤ちゃんの上手な育て方	内藤寿七郎監・宮崎 叶著	大日本雄弁会講談社	
32	49	これからの育児・これからの家庭	木田文夫	婦人画報社	
32	50	育児の事典	緒方安雄	実業之日本社	
32	51	お産と育児	中島 精	金園社	
31	52	育児全書	斎藤文夫ほか	主婦の友社	
31	53	完全な育児 365日	木田文夫・平井信義	婦人画報社	○
30	54	上手な育児・下手な育児	木田文夫	婦人画報社	
29	55	ママさん文庫①赤ちゃんの育て方	主婦の友社編(緒方安雄他)	主婦の友社	○
26	56	赤ちゃんの育て方	三宅英一訳(総社編訳)	雄鶏社	
23	57	病気をさせぬ新育児法	中鉢不二郎	婦人図書出版社	○
22	58	やさしい育児問答	高谷 淳	高島屋出版社	
22	59	育児実習書	斎藤文雄・小林 彰	栗林書房	
20	60	育児手帳	武田幸夫	東京出版	

の育て方しだいで将来が決まってしまうというのは正確ではないとしていた。また、4年の「ひとりひとりのお産と育児の本」(No.3)では「三つ子の魂百までも」という言葉は用いられていなかったが、「3歳までにきまる」説についてというコラムが掲載され、「しつけを始める時期を設定するのがナンセンスであるのと同じ意味で、このように限界を設ける説もまったく納得できません」と述べられていた。

このように、「三つ子の魂百までも」は調査した育児書の28%に引用されていたが、昭和40年代までは「のちの時期の発達に問題を残す」というような意味にとれるような記述が半数(4冊)にみられた。50年代に入るとわが国で古くから言い伝えられてきたことわざの一つとして紹介されたり、「のちの時期の良好な発達をもたらす」ために働きかける育児の提言として用いられていた。60年代以降は40%の育児書に引用されていて、数の上ではその割合がもっとも高くなっていた。しかし、内容はそれまでとはやや異なり、神経生理学の解説を含めて納得がいくような記述がなされたり、子育てに不安を感じる母親たちを助ける姿勢で記述されたものもみられ、「3歳児神話」にとらわれない視点で記述されたものが多くなっていた。

文 献

加藤 翠：わが国における育児書発行の変遷。
日本女子大学紀要, 40:1-7, 1993

(2) 育児雑誌における「3歳児神話」の取り扱い方

育児雑誌には、核家族で育児をする母親達が

共感できる生の声が満載されており、育児期のバイブルのような存在になっている。母親達は育児雑誌を「育児中の母親の体験談が掲載されている」「役立つ情報で納得できる」「無理しない自分と同じような母親像に共感できる」「内容豊富でタイムリーな最新情報が掲載されている」「客観的データや専門情報が信頼できる」などの理由で愛読している(山岡, 1987)。

現在、乳幼児をもつ母親と妊婦を対象にした妊娠・育児の月刊雑誌が数誌刊行されている。もともとは婦人誌と呼ばれて、各出版社の看板雑誌であった「主婦の友」「婦人生活」「主婦と生活」などの育児記事が独立した育児雑誌として、1969年に「ベビーエイジ」(婦人生活社)が創刊されて以来、4年後の1973年には「わたしの赤ちゃん」(主婦の友社)、1983年には「スイートベビー」(主婦と生活社)が刊行されて、婦人誌の衰退と入れ替わるように売れ行きの伸びを見せた。その後、育児雑誌の好調な勢いに乗じて、各社ともに育児雑誌の中で扱っていた妊娠記事を月刊誌として切り離し、相次いでマタニティ誌を創刊するに至った。1985年4月には「マタニティ」(婦人生活社)、同年10月に妊娠・育児の総合誌「ピーアード」(小学館)、1986年10月には「パルーン」(主婦の友社)が刊行されて、妊娠・育児雑誌の黄金時代を迎えた。その後、1993年11月には福武書店(現在はベネッセコーポレーション)から「たまごクラブ」「ひよこクラブ」という妊娠・育児雑誌が同時に創刊された。また、その他にも、NHKのテレビ番組と連動する「すくすく赤ちゃん」や、育児雑誌業界の最古参である「赤ちゃん和妈妈」なども手堅い読

者を保持している。しかし、これらの育児雑誌の中には後発誌に押されて、休刊を余儀なくされた雑誌もあり、また、マタニティ誌も全般的に現段階では、やや不調気味な実情といえる。

しかしながら、これらの育児雑誌の発行部数は、各誌ともに最盛期か否かによって大きく異なるものの、公称で10数万部から30万部以上と、それらの合計は膨大な数となる。したがって、年間出生数との比率を考えると、実質的には相当な影響を与えていることが想定される。

さて、先に報告した調査結果では、「3歳児神話」ということばを育児雑誌から得たと回答した人が3割近くいた。そこで、現在発売されている主要な育児雑誌である「わたしの赤ちゃん」「ベビーエイジ」「ひよこクラブ」の3誌について、それぞれ創刊号から1998年3月号までの全号の目次を調査して、「3歳児神話」の取り扱い方を検討した。

その結果、いわゆる「3歳児神話」という言葉が直接的に記事のタイトルになっているのではなく、むしろ、そのような表現は避けているのではないかという印象すら受けた。

ただし、「3歳児神話」の実質的な内容をどのように定義づけるかによっては、毎号のように、その関連記事が載っていると言えなくもない。仮に、ここで「3歳児神話」の広い意味での定義づけとして、育児雑誌の記事と関連する項目を以下のように分類すると、①を除いて、②から⑤に関連する記事は繰り返し登場していた。

- ①「3歳児神話」が直接のテーマになっているもの
- ②0～3歳までの働きかけの重要性
- ③母子相互作用や母性論（発達心理学や初期

経験などの記事も含む）

④0～3歳までの五感教育・早期教育・知力、体力づくりやおけいこ事など

⑤大脳生理学・脳の発達に合わせた働きかけなど

現在、少子化時代の子育てをしている20代、30代の母親達は、育児の参考にする人として、さまざまな人達の中から「実家の母」を一番にあげており、育児情報源や育児モデルとしても実家の母親の影響が強い(山岡, 1998)。そして、現在の母親達が乳幼児期を過ごした1970年代に、つまり、実家の母親が子育てをしていたときに、これらのしつけや教育記事も特集記事として扱う育児雑誌が定着していった。

そこで、現在0～3歳児をもつ育児雑誌の読者中心年齢層、25歳から27歳の母親達が生まれた1971～1973年の婦人生活社「ベビーエイジ」の目次から、3歳までの働きかけや乳児教育に関連する記事を抜粋した。

《1971年度（昭和46年）》

◎子どもに外国語をいつから教える（藤永保）2月号

◎赤ちゃんにどんな音楽を聞かせていますか（桜林 仁ほか）4月号

◎あなたの赤ちゃんをすばらしい子にする方法—優秀児—（森 重敏）7～9月号

◎頭の良い子のほうが得？（無着成恭）10月号

◎保育の責任「赤ちゃんにとって最高の保育者はお母さん」（岡田正章）10月号

◎赤ちゃんの初期体験を追求した0歳教育 10月号

◎保育の責任「育児の基本はお母さんの生き方です」(岡田正章) 11月号

◎保育の責任「育児の社会化は両親のしっかりした考え方から」(岡田正章) 12月号

保育の責任の記事タイトルは目次には表示されていなかったが、本文より筆者が加筆した。この記事で、岡田は当時の話題になった「中央教育審議会」が出した4・5歳児と小学校1・2年生を一緒にした新しい型の学校を作る試みや「早期教育による才能開発の可能性」を検討することなどを取り上げて、独自の「赤ちゃん学校」を提案していた。また、3回連続の森重敏の「優秀児」では、優秀児の定義づけから始まり、家庭でどのように親が働きかけるかなどの実際が、各種の統計調査結果をもとに述べられていた。

《1972年度(昭和47年度)》

◎五感の教育(阿部 進) 1月号

◎家庭でできる英才教育(藤永 保) 2月号

◎愛についてのシリーズ 母性の愛がより高い姿をのぞむとき(星野 命) 4月号

◎エンゲルマン博士の数の教育法 3歳までの知的教育(松原達哉) 7月号

◎座談会 言葉はどうやって教えていったらいいの?(村田孝次) 8月号

◎よい遊びは赤ちゃんの心を豊かにします(金子 保) 8月号

◎赤ちゃんの心とからだの適応講座 神経の成熟が赤ちゃんの運動の礎です(前川喜平) 10月号

◎赤ちゃんの心とからだの適応講座 赤ちゃんは外界に触れて心の中に適応のしくみを育む

(小嶋謙四郎) 11月号

◎赤ちゃんの心とからだの適応講座 社会現象は赤ちゃんを変化させる(馬場一雄・保志宏) 12月号

《1973年度(昭和48年)》

◎赤ちゃんの行動科学講座 赤ちゃんがかわいい、それがお母さんの資格です(藤永 保) 1月号

◎赤ちゃんの行動科学講座 21世紀の良心、それはママが作ります(内沼幸雄) 2月号◎早期教育を考える(鯨坂二夫ほか) 附一早期教育教室ガイド 4月号

◎赤ちゃんの行動科学講座 潜在能力の開発(宮本美沙子) 6月号

◎赤ちゃんの人格形成の素材はママが与えています 自己像の育て方によって自信家にもダメな子にも(藤永 保) 10月号

◎零才から幼稚園へ 明日の赤ちゃんの教育を担うのは誰(持田栄一) 11月号

このように、1971~73年の3年間を見ても、前記した記事分類の②から⑤に関連した内容が隔月、もしくは毎月のように掲載されていたことがわかる。また、この時期は、日本の幼児教育の草分け的な存在である井深 大の「幼稚園では遅すぎる」(1971)をはじめとして、著名な乳幼児教育の啓発書が相次いで出版された時期でもあった。すでに井深は1968年4月に理事長を務める幼児開発協会から機関誌「幼児開発」を発刊していた。また、のちに、公文式国語の漢字カードで普及した石井式漢字を石井 勲は「リーダーズダイジェスト」などで盛んに提唱していた。この石井式漢字は、フラッシュ

カードで世に知られ、アメリカのグレーン・ドーマンの脳障害児教育のドーマン法とも相互に影響を与え合っていた。また、1971年には

「ドーマン博士の幼児開発法」が講談社から出版されていた。

1973年11月に創刊された主婦の友社「わたしの赤ちゃん」は、今年で25周年を迎える。育児雑誌が発行されてから10年経った80年代前半は、前抱き子守具や紙おむつの一般化で、赤ちゃんを前抱きにして背中にはデーバックや腰にはウエスト・ポーチを装備し、紙おむつで荷物を軽量化した母親達が子連れ外出をする姿が育児スタイルとして定着していった。「わたしの赤ちゃん」の記事でも、「子連れで何ができる？どこまでできる？」(81年3月)、「赤ちゃん連れ 初めての旅」(同年8月号)、「初めて赤ちゃんを預けるとき」(82年2月号)、「赤ちゃん連れ旅の手帳」(同年8月号)などの特集や付録が増えていき、その後、医師が同行する赤ちゃん連れの海外旅行の企画が流行するまでに至った。

次に、1981～1983年までの育児雑誌での「3歳児神話」に関連した記事を、「わたしの赤ちゃん」から抽出した。

《1981年(昭和56年)》

◎別冊第1付録 楽しい発達マンガ グ〜ンと伸びろ! 赤ちゃんの知能 1月号

◎別冊第1付録 赤ちゃんの生活リズムとしつけ 2月号

◎特集 0才時代にしっかり築きたい母と子のきずな 都立築地産院と家庭教育研究所を訪ねて 10月号

◎別冊第1付録 0才から2才までの心と体を

伸ばす積極育児法 12月号

《1982年(昭和57年)》

◎別冊第2付録 赤ちゃんの持っている芽を育てる 能力全開カードー視覚育児法ー 11月号

◎別冊第1付録 0～3才 赤ちゃんがいやがらない しつけしようずの本

◎別冊第2付録 赤ちゃんの持っている芽を育てる 能力全開カードー聴覚育児法ー 12月号

《1983年(昭和58年)》

◎別冊第1付録 0～3才 楽しく働きかけてあげましょう 赤ちゃんの能力を育てる本 1月号

◎別冊第3付録 赤ちゃんの持っている芽を育てる 能力全開カードー味覚育児法ー 1月号

◎別冊第2付録 赤ちゃんの持っている芽を育てる 能力全開カードー嗅覚・皮膚感覚育児法ー 2月号

◎別冊第2付録 全国リストつき ベビースクール何でもガイド 3月号

◎別冊第1付録 大きい、小さい、早い、おそいが気になるママへ 発育と発達安心ブック 5月号

◎別冊第2付録 ちょっとした働きかけで楽しく ふれ合い遊びカード 5月号

◎別冊付録 長期保存版 0～3才のおもちゃ完全ブック 8月号

◎別冊第1付録 今から始めたい体力づくり 0才からのたんれんブック 9月号

◎別冊第2付録 ふれあい遊びカード 手作り

おもちゃと赤ちゃんスペース 9月号

◎特別企画 いつごろできるようになるのかな
赤ちゃんの発達安心チェック (有馬正高)

10月号

◎別冊付録 じょうずに自立できる 0才からのしつけの本 11月号

◎100人のママに聞きました“早期教育”どう考えますか? 12月号

この当時の育児雑誌の特徴としては、「赤ちゃんの能力を育てる」というような内容が本文記事から独立した別冊付録となり、これらの乳幼児教育の情報の有無が育児雑誌を特徴づけるようになった。

胎児のもつ能力が超音波診断装置などの普及によって、よりビジュアルに映し出された。小林登がNHKテレビで紹介した夏山英一の手による胎児映像のドキュメントは、母親のみならず一般の人達にも大きな反響を呼び起こすことになった。そのため、同番組は再放送を繰り返すことになり、「胎児や乳児の能力」への関心を高める一つの要因ともなった。1993年11月に福武書店（現在はベネッセコーポレーション）から創刊された育児雑誌「ひよこクラブ」は、いままでの育児雑誌とは異なった編集方針が母親の本音心情を鋭く表現して、今日的な母親達から多くの共感を得た。そして、「ひよこクラブ」では、本稿で①～⑤に分類したような「3歳児神話」の内容記事を創刊以来、一度だけしか取り上げていなかった。一回だけの関連記事は、1995年4月号の特別別冊付録「赤ちゃんは天才だ!見る・遊ぶ・知る・食べる・感じる 赤ちゃんの力を伸ばす本」で、その別冊付録の巻頭に「3歳児神話」について数行触れ

ていただけであった。

ベネッセコーポレーション（福武書店）は1955年の創立以来、出版や模擬試験を中心に業務を行い、1970年代には高校・中学の通信教育を開始し、1980年に小学生用、1994年には2～3歳用の進研ゼミ、「おやこ講座」を開講し、現在は1歳児から就学前の幼児までを対象に5段階に分けた通信教材「こどもちゃれんじ」を公称125万の会員に向けて発信している。そのうち、1～2歳用の「こどもちゃれんじぶち」が20万部、2～3歳用の「こどもちゃれんじ ぽけっと」が27万部である。通信教材の内容としては、子どもの年齢や成長に合わせた遊びやしつけの絵本、ビデオやCD、手作り用の知育玩具の他に、親向けの情報雑誌が含まれている。そのため、ベネッセコーポレーションの育児雑誌「ひよこクラブ」としては、親向けの乳幼児教育やしつけに関しては、通信教材の冊子の方で専門情報として扱っているように思われる。さらに、「わたしの赤ちゃん」の出版元である主婦の友社は、カルチャースクールの草分けで、主婦の友カルチャーセンターには「母と子のプレイルーム」が開設されている。全国各地で展開しており、その他にも乳幼児を対象にした美術や音楽の才能教育・赤ちゃんの能力開発教室などを開講していることなど、それぞれの育児雑誌の編集内容が出版元の他事業との関連やすみわけ、特徴を担っていることも考え合わせる必要がある。また、育児雑誌の中での乳幼児教育・教材の広告やタイアップ記事も母親達には、教育情報として大きな影響を与えていることも明らかになった(山岡, 1987)。

ところで、およそ30年近い育児雑誌の歴史の中で、「3歳児神話」に関して直接的にテー

マにしていたのは非常に少なかった。その中から「ベビーエイジ」誌での座談会を2つ紹介すると、81年5月号の「『3才まではー』って言うけれど」では、乳幼児をもつ専業主婦の母親達4人と発達心理の村越邦男がまとめの司会役をしていた。また、82年5月号では、「3才までの育児はお母さんのもの？」と題する座談会形式で、司会は発達心理の佐々木宏子が行い、出席者は2才1ヵ月児の父親でカメラマン、9ヵ月の保育園児をもつ幼稚園教諭の働く母親と3才1ヵ月児の母親の3人の読者参加で、それぞれの立場からの発言であった。

しかしながら、80年代には、付録といえれば能力全開ブックの感があった「わたしの赤ちゃん」も、過去3年間は、この種の付録も特集も皆無であったことから、現代の育児中の母親達は、育児雑誌から直接的に「3歳児神話」という言葉や内容を手に入れているとは言えないのではないだろうか。

「3歳児神話」の視点で見ると、育児雑誌よりは、むしろ「胎教」から始まる働きかけということで、マタニティ雑誌のほうがさまざまな母体・母性啓発を記事として取り扱っている傾向が見られたことを、つけ加えておく。

(3) 育児中の親子を取り巻く乳幼児教育の実情

現在、子育てをしている母親達が乳幼児期であった60年代後半から70年代は、それまで伸びつつあった幼児教育産業が一斉に全国展開し定着した時期でもあった。彼女達は幼稚園や小学校低学年の頃からすでに、音楽教室や学習教室、スイミングスクールへと通い、従来型の習字やそろばんも支持されていた。一昨年度の調査結果によると、母親達が幼少児の頃の習い事の数は一人で平均して3.2であった(山岡, 199

6)。そのように自分自身が子ども時代に習い事に慣れ親しんで育った母親達は、自分の子どもにも早い時期から習い事を、あたかも育児の一環として始めることに抵抗がないように見受けられる。

過去に筆者(山岡)が何度か実施した0~6歳の就学前の子どもの習い事の調査では、乳幼児の場合には「スイミング・児童館のサークル・通信教材」、幼児は「スイミングや体操教室、楽器や音楽教室、プレイルームなど幼児教室、英会話」などが上位にあげられていた。

母親達に子どもの習い事を始めた理由を尋ねると、「スイミングは体力づくり」、「楽器は音感を育てる」、「英語は国際化時代のために」などがもっとも多くあげられた。しかし、その根底には、必ずといってよいほど、「親子で気の合う友達に出会いたい」という思いが含まれていた。友達づくりは、子育て中の母親の大きな関心事である。育児の悩みを共感を持って話し合えることでストレスが解消できるだけでなく、自分と生活感覚が近い友達と出会うことで、的確なしつけや教育情報をも入手できる。同じような育児観をもつ友人との交流の中で自分らしさや存在感を見いだしているのが、今日的な母親の特徴である。

育児も遊びも気晴らしも、自分が安心感を得られる少数のグループの中でのみネットワークを形成するのが、現在の30代を中心とした母親達の傾向であり、彼女達は子どもが小さいときから、児童館やサークル、教室、スイミングスクールなどに通い、親子で「外出育児ネットワーク」を形成してきた世代でもある。

「3歳児神話」の観点から述べるならば、早期教育の効果は、おそらく成功事例を数多くあ

げること示されるだろうが、中には子どもの意思を無視して早期教育を押し付ける母親がいることは予想される。どこまでが熱意の範囲で、どこからが強制になるのかは議論を要するが、早期教育の強制はマルトリートメントとみなすという観点からの検討も必要に思える(高橋ほか, 1996)。

(4) 小括

「3歳児神話」が母親に育児情報として、どのような媒体を経て受容されているのかを明かにするために、育児雑誌、育児書の内容を時系列的に検討した。

「3歳児神話」ということばはどの育児書にもみられなかった。他方、「三つ子の魂百までも」ということわざは育児書の28%に記述されていた。

育児雑誌においても「3歳児神話」ということばはほとんどみられなかった。しかし、直接的な表現はされていないものの、実質的な意味で、3歳頃までの働きかけが子どもの能力を伸ばすことに大きな影響力があるということや、この時期の母子相互作用が重要であるということが70年代から80代には繰り返して述べられていたことが明らかになった。

また、近年、乳幼児の能力を育てることを、専門家にまかせる育児の外注化が行われていることや、マタニティ時代や0歳時代からの親子スイミングなどが、育児の一環として抵抗なく母親達の育児生活に同化していることも特徴的な傾向であることを指摘した。今後も「3歳児神話」に関する母親の受けとめ方を、育児情報や乳幼児教育環境の視点からより深めて研究を進めていく予定である。

文 献

高橋重宏・庄司順一ほか：子どもへの不適切な関わり（マルトリートメント）のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究（3）．日本総合愛育研究所紀要，33：127-141，1996

山岡テイほか：6000人の育児用品白書．主婦の友社，1987

山岡テイ：幼児のしつけ・教育観調査．ベネッセ・コーポレーション，1996

山岡テイ：子育て基本調査報告．ベネッセ・コーポレーション，1998

5 外国の育児書における「3歳児神話」の位置づけ

諸外国の育児書において「3歳児神話」に相当する内容がどのように取り扱われているかを調査、検討した。ここで調査したのは、わが国に紹介されている図書のうち入手できたものであり、文献欄に示した。

(1) 外国の育児書の分析

① スポック博士の育児書（○数字は文献欄の番号に対応）

[天才児をつくれるか] p. 56-57

子どもはかまってもらえなかったり、無視されればなすと精神も知能も十分に発達しません。逆に教え込めば2歳の子どもでも字を読むことができるし、1歳でも文字や数や絵がかいてあるカードを見分けることもできます。そんな話を聞くと自分の子どもも赤ちゃんのときから適切なおもちゃをあたえ家でも学校でもうまく知能を刺激してやれば才気あふれる大人にな

って際立った活躍をするに違いないと発奮する親もいるようです。こういった野望を親がいただくのはまちがっているし、往々にして期待はずれに終わってしまうように私は思います。1歳から2歳の子どもは両親のすることを一生懸命まねをしながら大きくなります。3歳になると見るもの聞くもの何にでも好奇心を持つようになります。このようにこどもが親に近づこうとし、親がそれに十分応えてやるといったことがこの時期にごく自然にうまくいっていれば、賢く、有能で、協調性のある、愛すべき若者に育つものです。少なくとも小学校に入るまでは特に訓練したり教え込んだりする必要はないのです。〔生まれてから3歳になるまで〕 p. 58-59

2、3歳の頃までというのは、両親やそのほかよくめんどろをみてる人の態度によって、その子の性格がほぼ形づくられていく大切な時期です。おとなになってから楽道家でいられるか、それとも悲観主義者になるか、愛情深い人になるか冷淡な人間になるか、人を信頼するたちになるか、疑い深い性質になるかは、この最初の2年間に、その子の面倒をみた人の育て方でかなりちがってきます。ですから両親あるいは両親にかわって子どもの面倒を見る人のひとりとなりがないへん重要になるのです。

②ホワイト博士の育児書 p. 4, p. 11

私の指導したプロジェクトやその他の関連したプロジェクトの研究結果によると、人生最初の3年間（特に8ヵ月から36ヵ月）は、情緒的また知的な発達の上で、特別に重要な時期です。この時期に、お父さんお母さんは子どもの全般的な発達に対してその後の公的な教育全体よりも大きな影響を与えるのです。

学校は子どもたちが5歳か6歳になるまでは

彼らの面倒を見ません。ところが私たちの思うところでは、基礎的な発達に関しては、2歳から教育し始めたのではもう遅すぎるのです。

③育児書内容の国際比較分析

日米英仏中各国の育児観を、各国で出版された育児書をもとに比較分析している。5カ国を総合的に検討した場合、育児書の社会的基盤の共通性等を背景とした欧米と日本の育児書の類似性が指摘できるが、それは同時に各社会の歴史文化に彩られながら、個別性をも示している。フランスの育児書の世界的カリスマ的存在であるドルトー（心理学者）は「最初の3年間は家にいたほうがよい」としていたが、現在の母親の持っている家庭の外で働くことに対する強い欲求を認め「もし母親が、家にいることが我慢できなければ、外に行くのがよいだろう」と言っている。全体を通して「3歳」について特に触れている点はないが、排泄、食事行動の面できめ細やかなケアの必要な時期として捉えられている。

④育児の国際比較—子どもと社会と親たち

前掲の「育児書内容の国際比較分析」をもとに子育ての社会的意味を考えてみようとするものである。授乳、離乳、排泄のしつけ、おんぶ、添い寝などの日常的ケアや子ども観の比較をしている。

〔早期教育〕 p. 116-119

他国に比べ中国の育児書に目立つ話題として「早期教育」がある。日本でも早期教育は社会問題になっているが、主流の育児書ではそれを前面に出さない。あるいは、おそらく出してはいけないものだと考えられているのではないかと思われる。米・英・仏は、なおさらこの話題

は少ない。中国の育児書では、1991年時点ですでに「早期教育」はしばしば勧める形で登場している。例えば、「人生において幼児期は精神の“特許期”ともいえ、成長後では思考が散逸してしまうので、必ずや早期の教育をする必要があり、良期を喪失してはならない。」「ちようど身体が栄養を必要としているように、脳も早い年齢から刺激が必要」であり、「早期教育の根本目的は、赤子や幼児の脳の発育を促進する」ことであり、「早期教育の内容には、1知識の増進、2智力の発達、3美德の養成、4体質の増強」があるという。1997年にはさらに詳しいアドバイスがあげられている。欧米理論の影響のもと、国外の研究によると0歳教育は重要であり、十分な母性的愛情を受けずに1歳になると、人に対するやさしさがなくなるため、親は対話を重視し、愛情を育てる、感覚、動作の訓練が必要だというようなことも言われる。親が子どもの能力開発に熱心であることを前提としているように見えるアドバイスも目立つ。たとえば、児童心理学、教育学によると、0～3歳までの子どもを「正確な」方法で教育すると、潜在能力を発揮でき、それは無限であるというような著書でも、日本の例を出しながら、中国では体系的な早期教育がなかったことを反省し、親が早期教育が何であるかを雑誌や図書を読んで合理的に知るべきだという。しかし中国で言われる早期教育は、必ずしも数字を覚えるというような、知力のみを指しているのではない。たとえば「労働することによって、子どもの優良な品德を育てるのも最重要な欠くことのできない教育内容である—子どもの成長にとって、智力の要素のみが決定的な要素となるのではない」というような、全人格的な

形成を強調する傾向がみられる。

⑤赤ちゃんと遊ぼう p.1

…赤ちゃんにとって最初の2年間によい経験が用意されない場合、持って生まれた知的可能性をのばす機会は弱められてしまうだろうということをお願いしたいのです。もし全く同じ2人の赤ちゃんがいたとして、1人は何もない天井をみつめて何時間もベッドの中にほったらかされ、もう1人はあらゆる興味あふれる楽しい知的刺激にとんだあそびを経験したとしたら、この赤ちゃんは学校に行くようになっても成果があがるし、生涯を通じて進歩していくことでしょう。

⑥知能を高める育児プログラム〔赤ちゃんの知能とは〕 p.9-10

子どもの教育、特に幼児教育についてはこれまで多くの研究が成されてきました。これらの研究で明らかになったことは「子どもが幼児期に親からどのような援助を受けたかが、その後の子どもの発達に大きな影響を与える」ということです。それは後に、子どもが学校生活をしていく上でたいへん重要な意味を持ちます。…これらの研究で判明したことは「子どもが身体的、知的にもっとも発達する時期は、誕生から4歳までで、そのときまでにはほぼIQが確定する」というものです。4歳児のIQからその子が17歳になったときのIQをほぼ正確に予測することができるくらいです。それほど幼児期は子どもの成長にとって大切な時期でもあるわけです。幼児期に獲得した様々な体験はその後の子どもの行動を決定します。親が子どもの能力を発達させるために援助できるのは、子どもが誕生してから数年間の短い期間に限られるといっても過言ではないでしょう。

⑦さわってごらん [はじめに] p.17

人間の知力はほぼ50%が4歳までにでき、30%が8歳までに、あとの20%が17歳までにできるということが研究の結果明らかになっています。ですから子どもが独創性や感受性への道に確かな第一歩を踏み出すかどうかははっきりとママやパパにかかっているのです。⑧あそびながら学ぶ [はじめに] p.9-11

ここ10年のあいだに教育や幼児の専門家が、あそびは学習であり、さらにあそびは今まで知られている学習のなかでもいちばん効果的なものの1つであることに気づきはじめたのです。ある学習心理学者は、5歳までに子どもの知能指数(IQ)が基本的に確立すると考えています。さらに5歳までに、学習に対する態度や思考パターンが子どものなかに植えつけられ、このような態度や思考パターンが大人になってからの人生のなかで考え方を左右するようになると考えています。この時期は人間の知能の基礎を築くためにもっとも効果があがる大切な時なのです。私たちはあそびというものを大きな教育効果を持つものとして考えているのです。

(2)小括

今回検討したのは限られた文献にすぎないが、いずれも乳幼児期の重要さを指摘している。しかし、年齢区分的な重点の置き方には、著者により、また国によりちがいがあるといえる。

わが国の状況を理解するためには、諸外国の状況を参考にして相対化することも有効であると考えられる。しかし、そのさいには、育児、保育の制度、考え方のみならず、文化、歴史、法律、経済など多面的にとらえた中で検討しなければならず、これ自体非常に大きな課題といえよう。今後取り組むべき課題といえる。

文 献

- ①B. スポック (暮しの手帖翻訳グループ訳) : スポック博士の育児書. 暮しの手帖社, 1996
- ②B. L. ホワイト (巷野悟郎監修) : 続 ホワイト博士の育児書. 同文書院, 1985
- ③加藤燕子・恒吉僚子・S. ブーコック : 育児書内容の国際比較分析—日米英仏中五カ国の 育児観—. 財団法人地域社会研究所, 1994
- ④恒吉僚子・S. ブーコック : 育児の国際比較—子どもと社会と親たち—. 日本放送出版協会, 1997
- ⑤I. J. ゴールドン (石垣恵美子訳) : 赤ちゃんと遊ぼう—お誕生から2歳児まで—. 黎明書房, 1975
- ⑥G. ペインター (坂本洲子訳) : 知能を高める育児プログラム—親子で行う「遊び」0歳～3歳まで—. 一光社, 1993
- ⑦S. ストライカー (曾田和子訳) : さわってごらん—ママは豊かな心に育てたいの—. 日本実業出版社, 1998
- ⑧J. マーゾッロ, J. ロイド (南博訳) : あそびながら学ぶ—手づくり幼児教育のすすめ—. 誠信書房, 1993

6 「3歳児神話」を肯定する、あるいは否定する知見の検討

「3歳児神話」を肯定する、あるいは否定する知見の検討を次の視点から行った。すなわち、「3歳児神話」を「3歳までの養育環境(およびそれにもとづく発達状況)が決定的に重要であり、のちの発達経過に大きな影響を与える」

と考えるならば、それを検証する課題は次のようになると思われる。

課題1 3歳までの発達に望ましくない環境が、のちの時期の発達に問題を残す（永続的な、かつ明らかな悪影響を生じる）

課題2 3歳までの良好な発達は、のちの時期の不良な発達をもたらさない（あるいは影響しない）

これらのことを人間において厳密に検証することはむずかしいであろうが、ここでは、次のことについて検討する。

課題1について

3歳まで望ましくない環境で育てられ（そしてその結果不良な発達状態にあったならば）その後保護され、ほぼ通常的环境中で養育されたとき、先天的な障害がないにもかかわらず、回復せず、発達が不良なままであるならば、「3歳児神話」は肯定されると考えられる。しかし、3歳あるいはそれ以後まで不良な環境にいたにもかかわらず、完全な回復（正常な発達）をみたならば、「3歳児神話」は否定されると考えられる。

このことについては、いくつかのデプリベーション事例（放置されていた事例）により検討する。

課題2について

3歳まで良好な（あるいは通常の）養育環境にいた子どもはのちの発達状況が良好で、問題行動を生じないならば、「3歳児神話」を確証する知見といえよう。しかし、3歳まで良好な（あるいは通常の）養育環境にいたにもかかわらず、のちに発達状況が不良になったり、問題行動が発現したならば、「3歳児神話」は否定されよう。

このことについては、例えば非行少年の事例の検討により検証できると考えられるが、今回検討することはできなかった。

「3歳児神話」を母性神話と関係させて「3歳までは母親による養育が重要である」とするならば、もう一つの課題が生じてくる。

課題3 3歳児神話を母性神話と関係させて「3歳までは母の手で育てることが決定的に重要である」とするならば、この時期に母親の手を離れて育った子どもの発達状況等について検討することが必要になる。

このことについては、3歳未満の家庭外の保育（とくに保育所における乳児保育）の影響（短期的、長期的）を調べることにより検証したいと考える。

以下、得られた資料の範囲で、検討を行う。

A デプリベーション事例の検討

デプリベーション(deprivation)とは、施設や病院で生活することによって心身に悪影響が生じるホスピタリズム(hospitalism)の原因となるマターナル・デプリベーション(maternal deprivation)をさすことが多い。マターナル・デプリベーションとは、母親剥奪、母性剥奪などと訳されるが、母親が与えるような愛情に満ちた世話を受けられないこと、という意味である。このようにマターナル・デプリベーションはかなり多義的であり、心身の発育・発達に必要な栄養、感覚刺激、言語刺激、社会的刺激、文化的刺激の貧困や、運動の制約などをともなう、複合的な状況といえる。最近、大きな関心をもたれている子ども虐待の1つのタイプであるネグレクト(neglect)と関連が深いといえよう。

ここで検討を試みる事例は、非常に極端な、重篤で長期間にわたるデプリベーションを受けた事例である。ここでは、文献として報告された事例について、長期にわたるデプリベーションが、子どもにどのような影響をもたらすか、とくに前述の課題1との関連において、その影響を克服できるものかどうかを検討する。

表1に事例の概要を示した。これらの事例の多くは臨床的研究の膨大な資料にもとづいて報告されているし、また決して経過を簡単に要約できるものでもない。したがって、詳細は原著にあたっただけしかない。

デイビスの論文(Davis, 1940)が報告したのはアンナという事例である。アンナは1938年、6歳のとき、農家の物置に閉じ込められていることから保護された。アンナは父親不明の子として生まれ、それを恥じた祖父が引き取ることを拒んだため、生後5カ月半まで施設や里親家庭を転々とめぐった。その後、実家に引き取られたが、物置に閉じ込められ、保護された後は施設入所となった。その後、アンナは多少の進歩は示したものの、8歳2カ月のときの精神年齢は1歳2カ月相当であった。デイビスは追跡研究を報告しているが、アンナの進歩ははかばかしくないまま、10歳で生涯を閉じた。デイビスは、アンナを生来性の精神遅滞と考えるようになった(Davis, 1947)。

メイソンの論文(Mason, 1942)は、聾啞の母とともに一室に6年半の間閉じ込められていたイサベルという少女の記録である。保護されて後、イサベラはたいへん順調な経過をたどった。

コルチョーヴァ(Koluchova, 1972)は、1歳半から7歳まで、家の小部屋に閉じ込められ、外界から隔離されて育った双生児について報告し

ている。小部屋に閉じ込められる前は、施設や親族宅ですごしていた。1976年の論文は、その後の経過を報告したものである。

カーティスの著書(Curtiss, 1977)はジーニーと名付けられた、父親に13歳7カ月まで小さな一室に監禁されていた女兒について、保護してからの、主に言語的側面についての発達と援助についての学位論文である。亀井(1979)は本書を紹介し、杏子という予後不良の事例を簡単に記載しているが、検討できるほど詳しくはないのでここでは省略する。ライマーの著書(Rymer, 1993)は、ジーニーのその後と、このような大きな話題をよぶ事例をめぐる研究者間の葛藤や、研究と臨床の問題を論じたドキュメントである。

西田ら(1972)が報告しているのは、父親により約10年間家の中に軟禁されていた3人のきょうだいについてであり、これらの子どもたちは約3年間追跡された。他の事例とちがうところは、軟禁されてはいても、父親は子どもに暴力をふるうことはなく、むしろ貧しい生活の中で、百科事典を買ったり、本を読み聞かせたりしていたことである。これらの児は、その後順調に育ったといえる。

藤永らの著書(1987)は、1972年に発見された、当時6歳と5歳の姉弟についてその後13年間にわたり追跡した記録である。記録の詳細さ、他の研究の紹介と解説、理論的検討など、他に例のない重要な著作といえる。これらの子どもたちは、はじめに予想されたよりもめざましい発達をとげ、完全に回復したとはいえないにせよ、かなり良好な状態になった。

さて、これらの事例を検討して、結論的には、生後3年間をこえてデプリベーション環境にあ

ったにもかかわらず、精神遅滞と思われるデ
ビスの事例アンナを除き、かなりの改善をみた
事例（カーティスの事例イサベル、藤永らの事例
F、G）や、良好な状態にまで発達した事例
（メイソンの事例イサベル、コルチョーヴァの
事例PとJの双生児、西田らの3きょうだいの
事例）もあった。これらの事例がおかれたデプ
リベーションの重篤さ、期間の長さを考えれば、
その後の回復状況からは臨期期仮説がそのまま
確証されるとはいえないことは明らかだろう。
もちろん、これらの事例においても、もしもよ
い環境ですごしたならば、彼らの潜在力をもっ
と高められた可能性は大きいわけで、乳幼児期
の養育環境がたいへん重要であることはいま
でもない。しかし、3歳までに子どもの能力、
才能、性格が決まってしまうと言い切ること
はできない。

文 献

Curtiss, S. : Genie: A psycholinguistic study of a modern-day "Wild Child." N. Y. : Academic Press, 1977 (久保田 競・藤永安生 訳 : ことばを知らなかった少女ジーニー. 築地書館, 1992)

Davis, K. : Extreme social isolation of a child. American Journal of Sociology, 45 : 554-565, 1940

Davis, K. : Final note on a case of extreme isolation. American Journal of Sociology, 52: 432-437, 1947

藤永 保・斎賀久敬・春日 喬・内田伸子 : 人間発達と初期環境. 有斐閣, 1987

亀井 尚 : ジーニー—現代版狼少女の言語学的

分析—. 言語, 8(7) : 51-59, 1979

Koluchova, J. : Severe deprivation in twins. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 13: 107-114, 1972

Koluchova, J. : The further development of twins after severe and prolonged deprivation: A second report. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 17: 181-188, 1976

Mason, M. K. : Learning to speak after six and one-half years of silence. Journal of Speech Disorders, 7: 295-304, 1942

西田博文・伊藤禎子・高木和子・山上敏子・村田豊久 : 長年、社会から遮断されて育った3きょうだい. 精神医学, 14(8) : 705-714, 1972

Rymer, R. : Genie: An abused child's flight from silence. 1993 (片山陽子訳 : 隔絶された少女の記録. 晶文社, 1995)

表 デプリベーション事例の概要

事例 No	名前	報告者 (年)	年齢		デプリベーション状況	発見時の状態	経過および発達状況	備考
			発見時	追跡時				
1	アンナ	Davis (1940, 1947)	5:11~10:5	5年半	母親が父親不明の子どもを出産し、これに祖父が怒り、引き取ることを拒否したため、その子どもアンナは生後5カ月半まで、施設や里親を転々とした。引き取られてからは、2階の屋根裏部屋へ閉じ込められた。発見されたときは古椅子にしばりつけられていた。母親は食事を与える以外の世話はせず、栄養も牛乳を与えるだけであった。	無表情で、仰向けに横たわったまま、動かず、何にも関心を示さなかった。やせていて、骨に皮膚がはりついているようになり、歩行も、しゃべることもできなかつた。アンナは農家に保護されたが数日後には、手足を動かし、視覚や聴覚の反応を示すようになった。	農家に9カ月、次いで里親のもとに9カ月のうち、アンナは知能遅滞児のための小規模な学校へ移った。その間、体重は増加し、発声がみられるようになったが、保護されて4カ月の時点では精神発達は1歳未満と推定された。保護から約1年後に歩行ができるようになったが、無目的に歩きまわる状態であった。保護から約3年後には、投げられたボールをつかむことができ、排泄は自立し、服をだいたい着れるようになり、そしてことばを発するようになった。アンナは自分の要求をいくつかわ文で伝えることができるようになった。しかし、進み方は遅かつた。アンナは保護されて4年半後の10歳5カ月のとき出血性黄疸で死亡した。	母親は精神遅滞があり、アンナは二人目の子どもでもあった。
2	イサベル	Mason (1942)	6:~8:	6年	出生直後から母子は日除けをおろした一室に閉じこめられていた。日も当たらず、新鮮な空気が流れてこない部屋で、十分な栄養も与えられず子どもはくる病になり、両脚とも湾曲し、歩行もできなかつた。母親はまったく教育を受けていず、しゃべつたり、また読んだり書いたりすることはできず、自分で考え出した身振りでコミュニケーションをとっていた。	小児病院に入院。2日間は泣いてすごした。ミルクとクラッカー以外の食べ物には口にせず、開わりをもととすだけにも関心を示さず、あるい恐れを示した。4日目には、2度目の面接をした著者がみせた腕時計や人形に興味を示し、いくらか食べるようになった。6日目には母と子の間で身振りによるコミュニケーションがみられたが、発声はなかつた。	9日目に降、模倣による発声がみられるようになった (ball, car など)。2週間後、ことばと対象を結びつけるようになった。20日後、ママなど自分から言うようになった。以後、順調に発達していった。22カ月後、知能は正常、想像力豊かで感情も豊かな、愛らしい8歳の少女となった。攻撃性やがんこさ、ひどい拒否的な態度がみられることがあるが、ユーモアもあり、よい社会的適応を示している。	

事例 No	名前	報告者 (年)	年齢		デブパベーション		経過および発達状況	備考	
			発見時	追跡時	期間	状況			
3	P. M. ♂	Koluchova (1972, 1976)	7: ~14:		1:6-7: 5年半	1 卵性双生児。母親は出産後死亡。 11 カ月間乳児院。その後、父方親族、養護施設、 父親が再婚した家庭で育つ。 継母は知的には平均的、しかし、自己中心的、 感情欠如、精神病質的、歪んだ価値観。 父親は知的には平均より低く、受け身で無口。 情緒的関係と刺激に欠けた環境で育った。外界 から隔離され、家の外に出ることや居間にはい ることも許されなかった。小部屋で生活し、し ばしば地下室に閉じ込められた。	3 歳程度にみえた。歩行も困 難。くる病。I Qは40台。 動く玩具やテレビなどを恐れ た。ことばは不十分で、二人 の間コミュニケーションは 身振りによっていた。遊びは 物を手にするだけだったが、 すぐに撒放遊びが発達した。 特徴的だったのは絵の意味を 理解できないことだった。	幼稚園では活動に参加せず臆病で疑い深かった。 しかし、里親家庭で順調に発達していった。I Q は8歳のとき80(P)と72(M)であったが、14歳では 100(P)と101(M)となった。知能は標準に達し、行 動や対人関係には問題はない。彼らは、社会的で 幸福で、里親家庭の人たちとしっかりと絆を結 んでいる。普通学級に通い、よい成績をとってい る。	
5	ジーニー	Curtiss (1977) Rymer (1993)	13:6~18:		13 年半	一室に隔離し、ベッドにしぼりつけ一日中放置。 父親は赤ん坊の泣き声に絶えずいらだった。家 の中では物音一つしない環境であった。 一日3回ベビーフードを与えるだけで、その際、 イヌのようにならざるがうなり声を発した。 遊具はチーズ容器と糸巻きだけ。	身長137cm、体重26.8kg 過度の栄養失調。 歩行可能。 着衣しない、寒暖を感じない。 ない。 精神年齢1歳5カ月。	保護されて1カ月後に始語。 正常に近い言語獲得を示している反面、18歳にな っても依然として正常でない言語獲得の側面も認 められた。言語理解に対して、言語表出が遅れて いた。	帝王切開 交換輸血 本児は第4子(はじ めの2児は死亡)、 第3子は祖母が養育
6	I ♀	西田ほか (1972)	14: ~17:		約10年	子どもがいじめられるのをおそれ、なるべく外 にださないようにしてきたが、長女(I)を就学 にさせていないことが発覚しないよう、外部の人 に顔をみられないように厳しく言いつけ、家の 中に完全に軟禁するようになった。長女のみは 2、3歳頃まで外で遊んだ経験があるという。 父親は家の中で虐待をすることはなく、いろいろ な話を語ってきかせた。	3 年後に長女(I)は社会に出て働いていた。 長男(II)、次女(III)は施設内および学校において よく適応。Iはとくに問題もなく周囲に適応し、 成長した。IIは施設でリーダーシップをとれるほ どたくましく成長した。IIIは少しづつ周囲の人に に自然な感情を向けていくようになり、素直でや や引っ込みがちな少女に成長した。		
7	II ♂		12: ~15:						
8	III ♀		10: ~13:						

事例 No	名前	報告者 (年)	年齢 追跡時	デブリーベーション		発見時の状態	経過および発達状況	備考
				期間	状況			
9	F♀	藤永ほか (1987)	6: ~18: 5: ~17:	5、6年	出生直後から、ときどきまぐれな世話を受ける程度でほとんど放置状態にあった。母親は抱いてお乳を飲ませた記憶がなく、食事をもっていたさいに「くえ」その他まきまきことば以外話しかけをしなかった記憶もない。	救出前の1年9カ月間は戸外の小屋に放置されていた。ただし、日中は寺の裏庭に連れ下ろされて遊んでいた。母親との間にはわずかな接触しかなく、愛着も形成されていなかった。しかし姉兄たちとの接触は比較的豊かであった。身体的暴力は少なかった。	救出後1週間足らずの間に2人とも歩き始めた。身体的回復はきわめて順調に達成された。Gは標準に追いつき、Fはきわめて小柄ではあるが、平常の域にある。永久歯の出現は14~15歳。運動発達は救出後3年でほぼ標準に追いつく。手先の技能の発達も順調。	多子家庭。母親は前夫との間に2人、現在の夫との間に7人の子どもをもうけた。本児らは6、7番目。第8子は死亡、第9子は養子になる。父親に精神的問題。
10	G♂					身長80cm、体重は8kg。つかまり立ちにはできなかったが、歩行は不能。Fの発語は3語、Gは発語はなかった。総合すると、Fは1歳半、Gは1歳程度の発達と推定された。	完全に回復したが、内言あるいは形式言語の面の遅れや欠陥は依然として残存。認知・知能に関しては総括的には回復した。IQは平均よりかなり低いが、日常生活ではほとんど遅滞はみられない。社会・情動的発達は臨界期的なものを上回る回復を示した。2人とも非社会的ではあるが、問題はほとんどみられない。	

B 乳児保育の効果の検討

「3歳児神話」を肯定あるいは否定する知見を検討するために、「乳児保育の効果」に焦点をあて、文献による考察を行った。乳児保育について焦点をあてたのは、この時期に母親の手から離れた場で保育されることは、「3歳までは母親の手で」という意味での「3歳児神話」と密接な関連があると考えたからである。

保育所に通所する子どもは、①日中、母親と分離している、②複数の養育者をもつ、③集団で養育される、という3点において家庭児とは異なる(繁多, 1981)。したがって、子どもの集団保育が、その子どもの心身の発育・発達にどのような影響があるのか、あらゆる観点から検討される必要がある。具体的には、身体発育、罹病傾向、問題行動、パーソナリティなどについて、保育期間中、保育終了時、あるいは数年後の状況を検討することが必要であろう。ここでは、乳児保育の経験の有無が数年後にどう影響しているかについての検討を主とした。

日本における「乳児保育」事業は、昭和30年代後半から乳児保育の要望が出始めたことを契機として、昭和41年に厚生科学研究「保育所での乳幼児保育実施および普及に関する研究」が、さらに昭和42年に「保育所における乳幼児保育実施上の諸要件に関する研究」が行われ、昭和44年に特別保育事業として制定された。平成8年度には、全保育所数22,452か所のうち、乳児保育は7,850か所(平成8年4月1日現在)実施されている。平成10年度には一般化される予定である。

このように、乳児保育が広く実施されている現状ではあるが、乳児保育の効果に関する研究は、その関連要因を限定することが難しく、ほ

とんど行われていないように思われる。そこで、日本子ども家庭総合研究所のデータベース(AiKEN-CD)の検索、および日本小児保健学会および日本保育学会の講演集の調査を行った。なお、同データベースには、1980年以降の児童家庭福祉・母子保健領域の雑誌論文の書誌情報が収録されている。その結果、乳児保育の効果に関する調査研究は少ないことが明らかとなった。ここでは、「論文」について検討し、「学会発表」についてはリストを示すにとどめる。

まず昭和41年に行われた厚生科学研究について検討を行い、次に論文として報告された諸研究を検討する。

(1) 昭和41年「保育所における『乳児保育』の研究」

厚生科学研究「保育所における『乳児保育』の研究」は、乳児保育を子どもの心身の発達に障害を与えないように実施する条件を見いだす前提として、現状の保育所において保育されている乳幼児の実態を明らかにすることを目的として行われた。この報告の中に「過去に乳児保育を経験した3歳児および5歳児にどのように心身の欠陥が見いだされるか」があり、以下に概要を述べる。

対象となったのは、いずれも、研究開始時期に保育所に入所していた子どもであり、3歳児8名(このうち、乳児保育経験あり4名、経験なし4名(入所年齢:2歳3名、3歳1名))と、5歳児8名(乳児保育経験あり4名、経験なし4名(入所年齢:2歳1名、3歳2名、4歳1名))であった。

研究方法は、①精神発達検査(津守・磯部式精神発達診断法(3~7歳))、②身体の発

育・健康調査、および③実験場面における行動観察であった。

この実験的な観察は、1)保育者が1対1の関係で子どもの相手をする(観察時間は3分間)、2)次に保育者は子どもから離れる(3分間)、3)子どものひとり遊びの場면을観察する(10分間)、というものであった。

観察期間は、昭和41年7月～11月であった。

主な結果を述べると、精神発達検査成績については、3歳児および5歳児において、乳児保育の経験の有無によりDQをu検定で検討したところ、いずれの発達内容においても有意差は認められなかった

身体の発育および健康調査については、昭和35年度厚生省発育値大・中・小に合わせて発育分類、Kaup指数、満川氏式ペンタコグラム図表による判定を行ったが、3歳児、5歳児とも、乳児保育の経験の有無により、とくに一定の傾向があるとはいえない、というものであった。

実験場面における行動観察については、まず3歳児群では乳児保育の経験の有無でとくに行動上の項目に有意差は認められなかった。これに対して5歳児群では、大人や子どもに話しかけたり、遊びに誘う、物を与える行動が乳児保育経験ありのものにより多くみられた。しかし、その他の行動においてはとくに両群間に行動上の差異は認められなかった。ただ、担任保育者の感想としては、日常の保育場面に両群間に行動上の差異がみられることを認めている。

以上をまとめれば、3歳児および5歳児において、乳児保育を経験した子どもとしない子どもとの間に特記する差異は認められなかった。しかし、まったく行動上のちがいがみられなかつ

たというわけではなかった。保育担当者はいくつかの疑問をいただいていた。すなわち、家庭児に比較して、1歳および1歳6カ月児の運動的活動の旺盛さ(集中力の欠如と解釈することもできる)が目につくことのように思われ、集中性など、後の行動にどのように影響していくのか、観察項目の再検討の必要性があると指摘された。しかし、その後の報告は行われていない。

(2)身体発育および精神・行動発達

京都女子大の佐藤益子によって「乳幼児集団保育の身体発育および精神・行動発達への影響」が報告されている(佐藤ほか,1981)。これは、3歳未満の集団保育児について、身体発育、精神・行動発達を縦断的に家庭保育児と比較分析をしたものである。

その結果、身体発育では全国平均値にほぼ等しい数値を示したが、精神発達では生後12か月までは、総発達指数と、言語を除く領域別発達指数は、いずれも、家庭保育児が集団保育児より有意に高くなっていた。しかし、1歳以後は総発達指数に有意差はみられなくなり、領域別発達指数では、社会性の発達が19～24か月に、言語発達が19か月以降に、集団保育児の方が家庭保育児より有意に高くなったとされている。

1990年に同じく佐藤らにより「乳幼児集団保育の追跡研究—幼児期の身体発育、行動発達—」が報告され(佐藤ほか,1990)、前述の乳児期に続いて、幼児期における身体発育、行動発達について検討がなされた。

その結果、集団保育児の身体発育は、3歳の体重を除き性差を認めず、年齢別に比較すると女兒では全年齢において家庭保育児よりやや大きく、とりわけ5歳児の体重には有意差が認め

られ、厚生省の80パーセンタイル値をやや上回っていた。

行動発達に関しては、スコアに有意差を認めた項目のうち、集団保育児が高かったのは5歳男児の転動性散漫と3歳女児の依存性、家庭保育児が高かったのは3歳男児の転動性散漫と自立性、5歳女児のすぐ泣き出すことと関心・興味の強さであった。

3歳未満に昼間保育を経験した児は、同じ期間に家庭保育であった児に比較すると、身体的には5歳女児の体重が大きく、行動面ではプラス面がやや多かったという結論が導かれていた。

さらに佐藤らは、「3歳未満児の学童期における身体発育、行動発達」を報告している(佐藤ほか, 1994)。これによれば、身体発育は集団保育児と家庭保育児の間に有意差は認められなかった。性差については、家庭保育児では小学3・4年の体重と中学2・3年の身長において男児が女児よりも有意に大きかったが、集団保育経験児では学童期を通じて認められなかった。

行動発達ではスコアに有意差を認めた項目のうち、集団保育児が高かったのは中学2年女児の転動性散漫と関心・興味が多いことのみで、集団保育児が低かったのは男児では小学5・6年、中学3年の多動、情動における小学1・2年の悲しみ、中学2年のおそれ、中学3年の気分の不安定、意欲における小学1～4年、中学1年の即行性と対人関係における中学2年の拒否、小学3・4年生の依存性、小学1・2年の顕示性であり、女児では対人関係における小学3・4年のはにかみであった。

問題行動については小学1・2年男児に器物破損が家庭保育児に多く、異性への異常な関心が男児では中学3年家庭保育児に、女児では中

学2年集団保育児に高かった。

これらの追跡研究によれば、身体発育に関しては5歳女児の体重が集団保育児で有意に重かったが、学童期では差が認められなかった。行動特性については幼児期では3歳女児の依存性、5歳男児の転動性散漫のみが集団保育児に目立った以外は家庭保育児より好ましい点が多くみられた。小学生では一層この傾向が強くなり、中学生では男児では好ましい点を残し、女児では中学2年のみ、少し目立つ行動が出現したが、いずれも幼児期の行動とは関連を認めず、中学3年では異性に対する関心が家庭保育児の男児に高いことを除いては、行動発達におけるプラス面、マイナス面の差は認められなかったとしている。

(3) 集団保育経験と知的発達

上田(1981)は、知的発達の面から、集団保育を開始する適切な時期、および保育がどうあることが望ましいかを検討する研究を行っている。

6か所の保育所に入所している5歳児計142名にWPPSI知能診断検査を実施した。これらの児を、入所時年齢で0歳代から4歳代まで5グループに分類し(0歳時入所児は35名)、分析を行った。その結果、入所年齢別IQは0歳代入所児107、1歳代入所児102、2歳代入所児103、3歳代入所児97、4歳代入所児97であり、0歳代入所児の指数が107ともっとも高かったが、有意な差ではなかった。またIQを言語性IQと動作性IQ、さらに10の下位テストの結果に分けて検討したが、やはり0歳代で入所した子どもの平均得点が全般的に高い結果となった。これは、複数の保育者や同年齢の子どもからの刺激があることによると考えている。6か所の保育所間の子どもの平均IQに

は大きな差はみられなかったが、下位テストにおいて特定の傾向がみられ、子ども達の保育環境（保育内容）の影響ではないかと推察している。

(4) 集団保育経験と社会性、性格の発達

百木(1980,1981)は、乳幼児期の集団保育経験がその後の社会性の発達に負の影響をもたらすのではないかとという仮説にもとづいて、社会性や性格について調査を行った。対象は、入所年齢の異なる保育園児 167 名であり、これらの児の親に「幼児社会性発達検査」および「幼児・児童性格診断検査」を実施した。その結果、「幼児社会性発達検査」については、1 歳代に入所した子どもがどのカテゴリにおいても得点が低く、次いで 2 歳代入所児であり、もっとも得点が高かったのは 0 歳代入所児であった。

「幼児・児童性格診断検査」については、全体に入所年齢による差は小さかったが、やはり 0 歳代入所児では得点が望ましい傾向を示し、1 歳代、3～4 歳代入所児はやや望ましくない傾向がみられた。(5) 集団保育経験とアタッチメント

アタッチメント(attachment)とは、特定の人物(通常は親)との間に結ばれる愛情の絆といえる。子どもの心の発達と健康に主要な役割をはたすものである。つまり、アタッチメントは社会性や知能の発達の基礎ともなるといえる。

乳児が特定の人物との間にアタッチメントを形成するためには、乳児とその人物との間に一定量以上の相互作用があることが不可欠の条件といえる。そういう意味で、保育所に入所した児におけるアタッチメント形成が問題となる。

繁多(1981)は、生後 6 カ月から 12 カ月までの家庭児 192 名、保育園児 196 名を対象に、ア

タッチメントに関する質問紙調査を行った。その結果、アタッチメント行動の開始時期には両群間で差がみられ、保育園児では家庭児よりも約 1 カ月遅く、生後 7 カ月から 8 カ月にかけて活発になることが明らかとなった。しかし、生後 10 カ月以降には差はみられなくなった。2 歳前後の保育園児の後追い行動は母親の拒否的な養育態度と関連しており、強い後追い行動が必ずしも健全なアタッチメントを形成しているとはいえないことなどの結果を得た。

(6) 集団保育経験と精神発達

網野(1992)は、過去 6 年間にわたり 4 保育園の縦断的調査、検査の結果のうち、とくに 0 歳から同一の保育園で保育を受けた園児について、精神発達、性格傾向について分析、検討を行った。6 年間の対象児は 2616 人(0 歳 57 人、1 歳 299 人、2 歳 372 人、3 歳 479 人、4 歳 535 人、5 歳 547 人、6 歳 327 人)で、そのうち性格傾向の検査の可能であった 3 歳以上の園児を対象としている。また、在園期間の明確な 325 人の 6 歳児のうち、59 人が 0 歳からの入園児であった。調査は、津守・稲毛式乳幼児精神発達診断法と高木・坂本式幼児児童性格診断検査を使用している。

その結果、精神発達、性格傾向ともに 0 歳から同一の保育園で保育を受けることは、在園期間が長くなるに従い発達上マイナスの評価が加わる傾向はみられていない。むしろプラスに評価される側面がみられている。3・4 歳頃までは 0 歳からの保育効果が有意にみられる部分もあるが、5・6 歳にかけてはその相違は顕著ではなく、生活習慣のように、保育経験や在園期間の長さがほとんど影響をおよぼしていないと考えられる面もあり、集団保育の効果と幼児期

における発達のプロセスとの相互関連性は、保育の進め方を考える上で興味ある結果となっている。性格傾向については、0歳からの入園児の方が幼児からの入園児よりも低い項目は非常に少なく、逆に高い項目の方が多かったことは、集団保育における保育者や他の園児との日常の相互関係を主とする人的環境が早くから提供されることが、安定性、積極性、適応性の面で必ずしもマイナスの効果をもたらすとはいえないことを示唆している。しかし、最年長である6歳では、社会性や保育所適応等は在園期間による差がみられないことは、保育効果と発達のプロセスとの相互関連性について考えさせるものがあるとしている。

以上の結果から、在園期間による特徴は、概ねこれらの分析結果を反映するものではあったが、在園期間との相関は非常に低いものであり、在園期間がこれらの精神発達や性格傾向に及ぼす影響には、その他の要因が多様に絡んでいることを改めて示唆するものであった。また、0歳児保育を受けている子どもの家庭背景をとりあげられなかったことや、保育方針や保育内容についても分析していないことをあげ、これらをふまえて保育環境の質と量が発達促進的の刺激として作用することは否定できないとしている。それが環境適応性の拡大により保育経験の長い幼児と短い幼児との環境の質と量としての相違を希薄化すると考えている。

(7) 乳児保育に対する保育者の意識

網野ら(1993)は、0歳児保育に関する保育者の見解について、全国の公・私立保育所計118園の保育者、0歳児保育を担当している保育者と担当した経験のある保育者、経験の無い保育者計1180名を対象として、保育者の年齢・0

歳児保育担当経験・保育者自身の子どもの頃の状況等の項目、および子どもにとっての乳児保育の効果・0～1歳時点での保育園児の傾向・0歳からの保育と年中・年長からの保育効果の相違・保育者にとっての0歳からの保育に関する意見・保護者にとっての0歳からの保育に関するなどの調査を行った。

結果は、保育者は総じて0歳からの保育効果を肯定的に受けとめていた。また、0歳からの保育効果は、とくに家庭環境では必ずしも得られない物理的・自然的環境や多くの子ども達とともに過ごせる環境・保健・栄養面の環境を評価する割合は非常に高い。0歳の時期から卒園するまでの保育環境は、親子関係を含む対人関係・社会性に関しても概ね望ましい発達状況にあると受けとめている保育者が多いが、一方0歳児保育に関しては、育児休業の普及等、家庭養育重視と、0歳児保育の推進との意見に二分されていることにも注目する必要があるという結果を報告している。また、0歳児保育経験と0歳児保育の受けとめ方としては、直接関わった経験者は、マイナス面を認識しながらも、未経験者よりも有意に保育効果を認めている。また乳児保育経験年数が多い方が望ましい発達にあると受けとめたり、育児休業よりも0歳児保育を肯定する割合が有意に高く、高年齢保育者も同様の結果となっている。これらを総合すると、経験の有無のみならず、経験の積み重ね、そして加齢が0歳児保育に対するプラスの効果として認めていることには意義がある。

そして、保育者と家庭との関わりについては、相互作用を持つ機関として、子育てに協力していくことが望まれる。そのためには、育児相談や講座等の運営企画等、地域に根づいた活動が

今後の保育者の役割として期待されるところである。

田川(1994)は、子どもの性差に関連して、0歳児から集団保育を受けた子どもの母親の25%が子どもの性別によって共働きのしやすさに差があるとし、そのうち82%が女兒の方がしやすいと答え、退職して専業主婦となった者には男児の母親が多いことから、乳児保育と子どもの性差について無視できないものがあると考えている。

(8)小括

乳児保育の効果に関する調査研究の数はきわめて少なく、これらの報告のみで乳児保育の効果を論じることはできないが、今回の検討においては、乳児保育が身体発育、精神・行動発達に影響(悪影響)を及ぼすとした報告はみられなかった。これに関連して、大阪府I市の昭和50年の出生児を対象として0歳から6歳までを追跡調査した「大阪レポート」(服部・原田, 1991)にも、乳幼児期までに表面化する発達に関してとはいう限定つきではあるが、母親の就労は子どもの発達にはっきりとした影響を及ぼしていないと報告されている。

乳児保育の効果について、マイナス面が全面的に出ている研究はほとんど見られず、多くは乳児保育の経験が発達を促進しているという結果が得られていた。また、乳児保育に対するニーズを考えると、乳児保育の是非論は既に無意味である。しかし、未だ乳児保育の効果は本当には明確にされていない。つまり、保育効果が出現するまでの期間や環境から、乳児保育の経験の有無でさまざまなちがいが子どもにみられたにしても、乳児保育の効果としては言い切れない。子どもの発育・発達には多くの要因が複

雑に関与している。それらの要因の中から、乳児保育にかかわるもののみを取り上げ、他の要因を排除していくことは不可能に近い。これらの要因の中でも、とくに乳児保育における保育の質はもっとも重要な要因とと考えられる。どのような保育目標を立てたか、実際の保育はどうであったかを記録し、そして、子どもの発達はどうであったのかという相互関係での、縦断的な研究が必要と考えられる。これに関連して、保育者や他の子どもとの相互作用、家庭環境、家庭と保育所の連携、そして集団構成人数や担当制などについても今後の課題といえる。さらに、今後の保育の方向性としては、乳児保育の効果を求めるよりも情緒的に安定した保育の実現に向けて、研究が行われることが望ましいと考えられる。このことは、保育者の意識や多くの研究の中で常に「情緒の安定」が意識されてきたことから明確であろう。乳児保育と家庭保育、その両者の場において、子どもが安定し、かつ適度な刺激を受けながら、発達が促されるような環境と成りえることが目ざされよう。

現在の乳児保育は、①低月齢化、②人数の多さ、③長時間化、④担当制の増加等、さまざまな課題も抱えている。上述のことをふまえ、今後さらに調査研究が行われる必要性があろう。網野も述べているが、乳児期早期における「相互性」「応答性」をもつ人的環境の意味を乳児保育において明確にすることは、更なる子どもを中心とした乳児保育の発展のためには、不可欠であると考えられる。

集団保育経験と母子関係・アタッチメントにおいては、乳児保育の効果を考えた場合にもっとも大切な要因と考えられる。アタッチメント

は、子どもの発達上、知能・社会性・精神発達の基盤となるものである。故に、繰り返し述べられているが、乳児保育の両輪としての家庭保育の位置づけをも考慮する必要がある。乳児保育対象児が、家庭において安定した母子関係を維持することができるか否かは、乳児保育が効果的な結果となる鍵になっている。このことは、乳児保育について論じる時に忘れてはならない。また、学童・青年期までという長いスパンの中で縦断的に研究することの必要性が感じられる。

保育者の乳児保育に対する意識については、乳児保育経験者と未経験者の意識の差は、あるいは、現場と一般との差だともいえる。実際に子どもの発達を目の前で見ることにより、現場の保育者が確認できることは、子どもの丸ごとから受ける実感としては確かな結果であるということが出来る。保育経験を重ねることによって乳児保育を肯定する者が増加するということは、乳児保育の効果の裏付けになる。

文 献

- 1) 厚生科学研究結果報告「保育所における『乳児保育』の研究」昭和41年、厚生省、1966
- 2) 佐藤益子：乳幼児昼間集団保育の身体発育および精神・行動発達への影響。小児保健研究、40(3)：265-270, 1981
- 3) 佐藤益子・衣笠紀玖子・雲出芳子：乳児昼間集団保育の追跡研究—幼児期の身体発育、行動発達—。小児保健研究、49(3)：332-337, 1990
- 4) 佐藤益子：3歳未満昼間集団保育児の学童期における身体発育、行動発達。児童学研究、24：3-12, 1994
- 5) 百木満ち子：乳幼児期の集団保育経験による性格発達について—その社会性発達との関連—。聖和大学論集、9：175-187, 1981
- 6) 田川悦子：零歳児集団保育を受けたこどもとその母親たちの追跡調査。児童育成研究、12：31-41, 1994
- 7) 網野武博・望月武子・加藤忠明ほか：乳児保育等がその後の発達に及ぼす影響。日本総合愛育研究所紀要、26：15-24, 1990
- 8) 網野武博・望月武子・加藤忠明ほか：乳児保育等がその後の発達に及ぼす影響Ⅱ。日本総合愛育研究所紀要、27：15-25, 1991
- 9) 繁多 進・荒巻万友美・林 睦子ほか：保育園児及び家庭児におけるアタッチメントの発達。母子研究、4：9-24, 1981
- 10) 繁多 進・新倉涼子・小林かおり・宮沢文子：保育園1, 2歳児のアタッチメントに関する研究。社会福祉研究所研究報告書「家族関係の研究」、1-30, 1983
- 11) 繁多 進：わが国における乳幼児のアタッチメントの発達。白百合女子大学研究紀要、26：209-229, 1990
- 12) 上田哲世：保育所における集団保育経験と知的発達との関連。聖和大学論集、9：241-254, 1981
- 13) 百木満ち子：集団保育開始の適齢期に関する研究—社会性発達の立場から—。聖和大学論集、8：1980
- 14) 百木満ち子：乳幼児期の集団保育経験による性格発達について—その社会性発達との関連—。聖和大学論集、9：175-187, 1981
- 15) 服部祥子・原田正文：乳幼児の心身発達と環境。名古屋大学出版会、1991

資料：乳児保育の効果に関する調査研究（学会発表）

【日本保育学会】

◆岩堂美智子ほかの研究グループ

- 1) 国家順子ほか：0歳児保育を考える(その1)。
第33回日本保育学会，1980
- 2) 堀井二実ほか：0歳児保育を考える(その2)。
第33回日本保育学会，1980
- 3) 田中文字ほか：0歳児保育を考える(その3)
－異年齢集団の交流について－。第34回日本保育学会，1981
- 4) 坂上優子ほか：0歳児保育を考える(その4)
－親との連携について－。第34回日本保育学会，1981
- 5) 船尾恭代ほか：0歳児保育を考える(その5)
－たてわり保育と親との連携－。第35回日本保育学会，1982
- 6) 吉田洋子ほか：0歳児保育を考える(その6)
－ならし保育について－。第35回日本保育学会，1982
- 7) 吉田洋子ほか：0歳児保育を考える(その7)
－「健康」をめぐる問題について－。第36回日本保育学会，1983
- 8) 吉田洋子ほか：保育所保育児の社会性の発達。
第38回日本保育学会，1985

◆金田利子ほかの研究グループ

- 1) 金田利子ほか：乳児期における家庭保育と集団保育の関連に関する総合的研究－異質論の立場から－(Ⅰ)。第32回日本保育学会，1979
- 2) 金田利子ほか：乳児期における家庭保育と集団保育の関連に関する総合的研究(Ⅱ)－両質保育の効果－。第33回日本保育学会，1980

- 3) 金田利子ほか：乳児期における家庭保育と集団保育の関連に関する総合的研究(Ⅲ)－乳児院における言語発達・内容と生活・保育の関連から－。第34回日本保育学会，1981
- 4) 金田利子ほか：乳児期における家庭保育と集団保育の関連に関する総合的研究(Ⅳ)－両者の接点としての近所保育（育児サークルの発展過程の分析から）－。第35回日本保育学会，1982
- 5) 金田利子ほか：乳児期における家庭保育と集団保育の関連に関する総合的研究(Ⅴ)－障害児保育を典型として－。第36回日本保育学会，1983
- 6) 金田利子ほか：乳児期における家庭保育と集団保育の関連に関する総合的研究(Ⅵ)－親の育児力の向上と集団保育（その1. 視角と方法）－。第37回日本保育学会，1984
- 7) 金田利子ほか：乳児期における家庭保育と集団保育の関連に関する総合的研究(Ⅶ)－親子関係の発展における「遊びの教室」の意義（その1 富士市の早期療育事業における「遊びの教室」の位置と役割）－。第38回日本保育学会，1985
- 8) 金田利子ほか：乳児期における家庭保育と集団保育の関連に関する総合的研究(Ⅷ)－親子関係の発展における「遊びの教室」の意義（その2 富士市「たんぼぼ教室」における事例的研究）－。第38回日本保育学会，1985

◆百木満ち子ほかの研究グループ

- 1) 百木満ち子ほか：乳幼児期における集団保育経験とその精神発達との関連－社会性－。第33回日本保育学会，1980
- 2) 百木満ち子ほか：乳幼児期における集団保育経験とその精神発達との関連(2)－性格－。第34回日本保育学会，1981

3) 上田哲世ほか：乳幼児期における集団保育経験とその精神発達との関連(3)－知能－。第34回日本保育学会，1981

4) 百木満ち子ほか：乳幼児期における集団保育経験とその精神発達との関連(4)－就学後の性格特性－。第35回日本保育学会，1982

5) 上田哲世ほか：乳幼児期における集団保育経験とその精神発達との関連(5)－就学後の学習適応－。第35回日本保育学会，1982

◆その他の研究グループ

1) 永野 泉：乳幼児の集団保育①－保育期間のおよぼす影響－。第35回日本保育学会，1982

2) 永野 泉：乳幼児の集団保育②－幼稚園児と保育所児の発達と母親の生活信条・養育態度の相違について－。第36回日本保育学会，1983

3) 伊志嶺美津子ほか：保育年数による発達差について(3) 保育開始年齢による検討。第36回日本保育学会，1983

4) 田辺敦子：乳児期の保育経験と幼児期の精神発達との関係について(その2)。第38回日本保育学会，1985

5) 流王 農ほか：保育所における体力づくり研究－10－保育年数による比較－。第39回日本保育学会，1986

6) 近藤信義：乳児保育に対する保育者の意識。第40回日本保育学会，1987

7) 村山道子：乳幼児集団保育の優位性について。第40回日本保育学会，1987

8) 若山 剛ほか：入園時期の違いと病気欠席率との関係についての一考察－0歳入園児と3歳入園児との比較－。第45回日本保育学会，1992年

【小児保健学会】

◆岩堂美智子ほかの研究グループ

1) 岩堂美智子ほか：乳児の発達と保育環境(1) 7カ月時における保育所入所児・家庭保育児を中心に。小児保健研究，45(2)：108-109，1986

2) 吉田洋子ほか：乳児の発達と保育環境(2) 0歳後半期の保育課題について。小児保健研究，45(2)：109，1986

3) 岩堂美智子ほか：乳児の発達と保育環境－(3) K式発達検査による追跡から－。小児保健研究，46(2)：135，1987

4) 吉田洋子ほか：乳児の発達と保育環境－(4) 仲間関係の発達をめぐって－。小児保健研究，46(2)：135，1987

◆佐藤益子・衣笠紀玖子ほかの研究グループ

1) 衣笠紀玖子・佐藤益子・田堂まゆみほか：早期昼間集団保育に関する研究－学童期の生活態度に及ぼす影響－。小児保健研究，45(2)：109，1986

2) 佐藤益子・衣笠紀玖子・橋本晴子ほか：乳幼児集団保育の追跡研究－学童期の身体発育、行動発達－。小児保健研究，45(2)：110，1986

3) 佐藤益子・衣笠紀玖子・橋本晴子ほか：3歳未満昼間集団保育の追跡研究－中学生の身体発育、行動発達－。小児保健研究，46(2)：135，1987

4) 衣笠紀玖子・佐藤益子・田堂まゆみほか：3歳未満昼間集団保育に関する研究－中学生の生活態度に及ぼす影響－。小児保健研究，46(2)：136，1987

5) 佐藤益子・衣笠紀玖子：3歳未満昼間集団保育の追跡研究－青年期の身体発育、行動および社会適応－。小児保健研究，47(2)：270-271，

1988

6) 佐藤益子・服部律子・林 正幸：保育園児の追跡研究—学童期における身体発育・行動 発達と保育開始時期の検討—。小児保健研究, 56(2): 202, 1997

◆その他の研究グループ

1) 加藤 翠・田近陽子ほか：乳幼児期の委託育児の発達に及ぼす影響—保育者から見た3 歳未満からの集団保育と家庭保育との評価について—。小児保健研究, 43(2): 228, 19 84

7 結論および提言

「3歳児神話」をめぐって、まず、そのことばの意味を検討した。「3歳児神話」は乳幼児期の重要性を意味するが、しばしばそれだけでなく、「三つ子の魂百まで」ということわざをひいて「3歳までに決まってしまう」とか、「3歳までは母親による養育が必要である」という「母性神話」といえる意味をもって使われることを明らかにした。

次いでその理論的根拠となりうる研究知見について概説した。これらは、新生児期、乳幼児期の重要性を示すものであった。

そのあと、このことばが実際にどの程度認知されているかを予備的な調査で明らかにした。その結果、「3歳児神話」ということばは70%ほどの人に知られており、その意味は、

「3歳までの子どもへの働きかけが、その後の子どもの成長・発達に大きな影響を及ぼす」とするものと、「3歳までは、とくに母親が子どもの育児を行うことが大事である」とするものが多かった。

次に、わが国において「3歳児神話」がどの

ような形で受け入れられてきたのかを明らかにするために、育児書、育児雑誌の時系列的な分析を行った。ここでは、「3歳児神話」ということばはほとんど使われていないこと、しかし、「三つ子の魂百まで」ということわざをひくなど、「3歳児神話」を示唆する記事は少なくないことが明らかとなった。

わが国の特徴を明確にするために、外国の育児書についても調査、検討を試みた。しかし、その内容は、著者により、国によりちがいが大きいようで、今後もっと詳細に検討を行う必要性が示された。

最後に、「3歳児神話」を肯定する、あるいは否定する知見の検討を、デプリベーション事例の検討と乳児保育の効果に関する文献研究により行った。デプリベーション事例の中には、長期間にわたって隔離された環境で育ちながらも、保護されてのち、心身のいちじるしい改善をみた事例のあることが明らかとなった。これは、乳幼児期の重要性を決して否定するものではないが、「3歳児神話」を肯定するとはいえない知見であることが示唆された。子どもの心身の発育・発達はダイナミックなものであり、乳幼児期の経験の影響を非常に大きく受けるものではあるが、その子どもの能力等が決定してしまうとする考え方を支持するものではないといえよう。

乳児保育の効果については、乳児期に集団保育を経験することがはたして「母親の手から離れた養育」を意味するののかということから検討すべきであろう。今回の検討をとおして明らかになったことは、実証的な研究が少ないこと、その研究結果が示唆しているのは、乳児保育を経験した子どもの心身の状況は、そうでない子

どもに比べて、明らかによいとは言いきれないにせよ、決して悪い状態にあるとはいえないということであった。

今後の研究課題としては、次の点を提言しておきたい。

(1) デプリベーション事例の検討に関連して、近年増加しつつある子ども虐待の事例について、虐待の影響、保護されてのちの回復の状況、回復のための条件等について研究を行うこと。

(2) 乳児保育の経験について実証的な研究を行うこと。とくに、「保育の質」を考慮した、縦断的研究が求められている。

(3) 外国の育児の状況、基本的な考え方、保育施策等に関する研究を行うこと。

(4) 今回は検討できなかったが、非行少年など、思春期に問題をおこした事例について、その乳幼児期からの発達に関する研究を行うこと。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

子どもの養育には3歳までの育て方が決定的に重要である、あるいは3歳では遅いなどといわれることがあり、「3歳児神話」ということばも使われる。こうしたことが、子育てへの負担感や焦りをもたらしてもいる。しかし、「3歳児神話」としていわれるようなことが、どのような根拠によるのか、またはたしてこれを裏付ける知見があるのかは、明らかではない。そこで、本研究では、発達心理学、臨床心理学、小児医学、家族社会学、保育学、育児学の専門家による討議と文献研究により、1)「3歳児神話」ということばの意味、2)「3歳児神話」の基礎となり得る理論的根拠、3)「3歳児神話」の認知度、4)「3歳児神話」ということば、あるいはその意味するところが育児書、育児雑誌においてどのように扱われているかの実態、5)外国の育児書における乳幼児期の取り扱い、6)「3歳児神話」を裏付ける知見、の検討を行った。